

主は、生きておられる

Unser HERR lebt

Unser
HERR
lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3・3)

2021 graph magazine vol. **57**

Unser
HERR
lebt

vol. **57** 定価100円(税込み)

Unser
HERR
lebt
主は、生きておられる

主は、生きておられる
Unser HERR lebt

メッセージ

4 イエスの救い(6) 神の永遠からの予定

ゴットホルド・ベック

24 あなたの神に会う備えをせよ 渡部^{やすし}弥寿志

6人の証し

33 カナダ人放蕩^{ほうとう}息子の証し チャールズ・ランメル

43 主イエス様の憐れみとお恵み ランメル・幸

53 主は私の羊飼^{まよこ}い 秋田万代子

64 たましいの牧者である主 田中明美

76 新しい創造 藤田^{やすのり}靖規

85 見えるものではなく 藤田^{あすか}明日香

イエスの救い(6) 神の永遠からの予定

ゴットホルド・ベック

今回は神の永遠からの予定について、一緒に考えてみたいと思います。

これまで何回かに分けて、どうしても知らなければならぬこと、神のなされた永遠に変わらない事柄について学んできました。

乱れきったこの終わりの世にあって、私たちはしっかりとした岩の上に堅く立たなければなりません。それは誰からも、また何ものによっても動かされることのない神の事実の上に立つということです。

この岩とはイエス・キリストであり、私たちはみな、尊い主イエス様の血潮を信仰によって見たのです。それだけではなく、毎日の信仰生活においても、この十字架で流された血潮が必要ですから、もともと

主イエス様の血潮に感謝の気持ちを多く持ちたいものです。

そして主イエス様の流された血潮とともに、イエス様の十字架についても学んで来しました。つまり、私たちの古い人はキリストとともに十字架につけられ、死んで、葬られてしまったこと、同時に、新しく造られた者として私たちがキリストとともによみがえらされたことも、見てきました。

それから、最も大切なことは、これらの事実が私たちの個人的な体験とならなければ何の役にも立たないということ、を、繰り返しお話ししてきました。

そのことを三つの点に分けて学びました。一番目は、私たちが主イエス様とともに死に、よみがえったとい

う事実を上からの啓示により霊的知識として知ること。

二番目は、この知識がまさに事実として自分のものとなっていると信仰の計算をし、確信すること。三番目は、死人からよみがえらせられ、神の御心に従って歩む者として、自分自身を神にささげ尽くすことです。すなわち進歩への道は、知ること、計算すること、ささげることです。(※)

(※)これら三つの点については、それぞれ54〜56号に掲載されています。

次は第四の点に向かうわけですが、その前に、今までの三つの段階を一つ一つ進んで行ったら、いったいどこに私たちは導かれていくのか、それを少し考えてみたいと思います。

今までは、どうすれば霊的に成長し、主イエス様と同じ似姿に変えられていくか、どうすればあこがれの勝利の生活に入ることができるかを問い続けてきました。これらはみな、信者一人ひとりについての問題です。しかし私たちは、主なる神が信者一人ひとりの進

歩だけではなく、さらに広い視野を持っておられることを知らなければなりません。そこで今回は、神の永遠の昔からのご予定というテーマで考えてみましょう。「創造における神の永遠からの予定」と、「救いにおける神の永遠からの予定」に分けて、学んでみたいと思います。

1. 創造における神の永遠からの予定

主なる神は、どういう目的で人間をお造りになったのでしょうか。

第一に、人間が神の性質にあずかるため。第二に、神のご愛に報い、こたえるため。第三に、永遠のいのちを得るため。これらが、人間をお造りになる前に、主なる神があらかじめ定めておられたご目的でした。

子どもは何かを作るとき、何を作るかはつきり決めないではじめてしまいますが、主なる神はそのようなことはなさいません。神様は、成し遂げることができ

ないようなことをおはじめにはなりません。「人の子」となって地に來られた私たちの救い主イエス様の場合、前述した三つのご目的を完全に満足しておられました。第一に、神のかたちであられました。神と同じ性質を持つておられました。私たちも神の性質にあずかるべきです。そして第二に、主イエス様は神のご愛にこたえることがおできになるお方でした。ですから父である神はイエス様に対して「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」(マタイ3:17)と言われたのです。私たちも神に喜ばれる者、主の御心になつた者となるべきです。第三に、主イエス様は永遠のいのちを自らのうちに持つておられました。では、主なる神の人間の創造におけるご予定はどういうものだったのでしょうか。詳しく見てみましょう。

御子が多くの子の兄弟たちの長子に

みことばが語っています。ローマ人への手紙8章29節を読みましょう。

ことは人となつて、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから來られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

(ヨハネ 1:14)

ここに「父の…ひとり子」とあります。父なる神は、ひとり子の御子イエス様だけではなく、多くの子どもたちをご自分のものとなさりたいのです。そして、ひとり子イエス様が長子となることが神のご目的なのです。主イエス様が長子となられるためには、他に多くの子どもたちがいなければならないわけです。主なる神が創造の時にあらかじめ定めておられたことは、ご自分が多くの子どもたちを持ち、その中で主イエス様が長子となることでした。

信者たちが眞の教会、御子の花嫁に

ところで、主なる神は多くの子どもたちを得たいと思つておられましたが、それは、あの子この子と個々別々の

イエスの救い(6) 神の永遠からの予定

神は、あらかじめ知つておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの子の兄弟たちの中で長子となられるためです。

(ローマ 8:29)

ここに「御子(すなわち主イエス様)が多くの子の兄弟たちの中で長子となられるため」と書いてあります。ヘブル人への手紙2章10節にはこうあります。

神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであつたのです。(ヘブル 2:10)

ここでは「神が多くの子たちを栄光に導くのに」と書かれています。ヨハネの福音書1章14節には次のように記されています。

子どもを欲しておられたわけではありません。ひとり子なる主イエス様のために、ひとりの花嫁を望んでおられたのです。多くの子どもたちの「ひとかたまり」が花嫁です。主イエス様の花嫁は、すなわち教会です。まことの教会です。すべての眞の信者の一群れです。

このことが耳から入った表面的な知識にとどまらず、上からの示しによつて心の目でこの事実を見ることができ、そのことにより私たちが変えられればほんとうに幸いです。私たち一人ひとりが、創造におけるこの主なる神のご予定を、はっきりと心の目で見るのが大切です。

まことの教会とは何でしょうか。それは、いわゆる「救われた罪人のひとかたまり」というだけではありません。主なる神は、人類が墮落する以前に、すでにこの教会を前もって定めておられたのです。

これから少し、最初の人間アダムのことを考えてみましょう。

二本の木とアダムの選択

第一の人、アダムはエデンの園に住んでいました。エデンの園の中央には二本の木が生えていました。それはいのちの木と善悪を知る木でした。それは、いのちと死の木だったのです。創世記の2章を見てみましょう。

その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。神である主は、東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。神である主は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木とを生えさせた。 (創世記 2:7-9)

神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。神である主は、人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま

ま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」 (創世記 2:15-17)

と、主なる神は言われたのです。アダムはじめ、何が良いか悪いかの分別がつかないように造られていました。善悪もわきまえも知らない、三十歳位の男の人を想像してみてください。あなたは彼を、成長の遅れた男だと思うに違いありません。アダムはちょうどそんな男でした。

神はアダムに、エデンの園の「どの木からも取って食べてよろしい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。食べると死んでしまうから」と言われたのです。同じ園の中央にいのちの木がありました。神は、どの木から取って食べても良いと言われたのですから、いのちの木から取って食べても良かったのです。アダムは罪に汚れていませんでしたし、同時に聖くもありませんでした。善悪を知らなかったの

です。

しかし、いのちの木の实を食べるか、善悪を知る木の实を食べるか、どちらかを選ぶ立場に立たされていました。と言っても、その時のアダムは、どちらを選べば良いかわからなかったはずです。善悪の判断ができない人間だったのですから。アダムがただ一つできることは、神のところに行って、どちらを選んだらよいか尋ねることでした。自分自身では何もすることができませんでした。全く神に頼り頼んで生活していました。

この二本の木は、人の二つの生き方を表わしています。一つは神の生き方であり、もう一つは人間の生き方です。いのちの木は主なる神を表しています。神はいのちの源であられます。そしてこのいのちの木の「実」は主イエス様です。木を食べることはできませんが、木の实は食べられます。主イエス様は、食べることのできる実のようなものです。私たちが受け入れることのできる、主なる神のかたちです。そしてこの木は、園の中央にありました。神はその実を食べるようにと、

アダムに強いることをされませんでした。

いのちの木の隣には善悪を知る木もありました。この木は、神に尋ねる必要はない、自分でできる、自分は利口だと言う姿を表わしています。けれども、愛する兄弟姉妹よ。ぜひ覚えておいていただきたいことは、主なる神に頼り頼まないこと、それは罪です。主なる神に頼り頼まないこと、それこそが罪なのです。

ご存じのように、アダムはついに善悪を知る木の实を食べてしまいました。その時何が起ったのでしょうか。

三つのことが言えます。一つは、神との交わりが断たれてしまいました。自分で善悪を知るようになり、利口になって独立しました。二つ目に、自由を得たのではなく、逆に悪魔の奴隷になってしまいました。三つ目に、アダムの霊は死に、神に対する感覚が無くなってしまいました。

アダムは罪を犯す前には神と交わる能力を持っていましたが、神のいのち、永遠のいのちはまだ持ってい

ませんでした。もしアダムが主なる神に尋ね、神に拠り頼み続けていたら、神はアダムをいのちの木に導き、その実を食べさせることにより、アダムに永遠のいのち、神のいのちをお与えになったことでしょう。アダムは神に造られた者というだけではなく、神の子となることができたはずで、神への従順と拠り頼みにより、神の子となつたはずで、しかし神への不従順と不信頼により、アダムとその後に連なる子孫、全人類は、神の呪いの下に置かれてしまいました。

この世には三つの生き方があります。一つは神の生活。二つ目は人間の生活。そして三つ目は動物の生活があります。

ある所に、有名な哲学者がいました。人々はその人をクリスチャンだと認め、彼もまた社会運動をすることを通じ、伝道していました。しかし、彼は生まれ変わりの必要を認めていませんでした。

ある時、一人の伝道者がその哲学者のところに来て、神の永遠のいのちを受け取ることの必要性を説き

ス様を受け入れ、主イエス様を『食べなければ』、神のいのちにあずかることはできません。神のいのちにあずかることなしに、神の子となることはできません」と、哲学者に説き聞かせました。哲学者はその日、生まれ変わり、神の子となることができたということでした。

全人類は、アダムの子孫として神の呪いの下にうめき苦しんでいます。しかし主なる神の永遠の昔からのご計画は、人間がこのような状態になることではありませんでした。人間が神の性質にあずかり、神の愛にこたえ、永遠のいのちを持つことが神のご予定でした。主イエス様が、多くの兄弟たちの中で長子となられるために、神は多くの子たちをお求めになつておられました。

ところが、神に対する不従順と神に拠り頼まない心から、全人類は神のご予定に反し、神の呪いの下に哀れにも陥ってしまったのです。このようになってしまった人間に対して、主なる神はなおもご自分の計画を、最後まで成し遂げることがおできになるのです。

イエスの救い(6) 神の永遠からの予定

ました。そのいわゆるクリスチャンの哲学者は、ちょうど重い病氣だったのですが、その枕元に犬が一匹いました。伝道者が哲学者に、「この犬は何と言う名前ですか?」と尋ねると、「ストロッピー」と答えました。伝道者が「それは苗字ですか? 名前ですか?」と尋ねると、哲学者は「姓も名もない。ただ、この犬はストロッピーと言うのだ」と答えます。哲学者の名前を仮にケネディとしましょう。伝道者は、「それじゃケネディさん。今度からこの犬を、ストロッピー・ケネディと呼んだらどうでしょうか?」と言いました。哲学者はもう怒りました。

伝道者は、「このストロッピーはどんなに利口だとしても、犬は犬ですから人間にはなりません。同じように、私たち人間はどんなに背伸びしても人間ですから、主なる神の生活をすることはできないのです。私たちはどんなに愚かでも利口でも、良い人間でも悪い人間でも、生まれつきのままなら、主なる神のいのちを自分のものとすることはできません。神の御子、主イエ

うか。

はじめから述べているように、神様のご予定は永遠の昔からのものです。従ってどんなに罪が入ってきても、神の予定を狂わせることはできません。

私たちの神は、先の先まですべての事を見通しておられる方です。何ものによっても驚かされることのない神です。私たちの神は、決して行き詰まってしまうことのない、知恵に満ちておられる神です。私たちの神は、不可能を知らない全能である力の神です。

2. 救いにおける神の永遠からの予定

今まで、私たちは「創造」における神の永遠からの予定について考えましたが、次に第二番目の点、「救い」における神の永遠からの予定について、お話ししたいと思います。

どうして神は、滅びゆく人間を救い出してくださったのでしょうか。神の永遠からの予定が満たされるた

めに、救いが必要なのです。ところが残念なことに、大部分のクリスチャンはこのことを知らないでいます。

主なる神は、人類に神の永遠のいのちを与えたいと願っておられるのです。神は、アダムが罪を犯す前から、人間には永遠のいのちが必要であることを知っておられ、永遠のいのちを与えようとしておられました。いのちの木は、人類が罪を犯す前にエデンの園の中央にありました。アダムが罪に陥る前に、主なる神は御子イエス様で表わされる木の実を人間に差し出すことにより、ご自分を人間にお与えになっていたのです。ですから神の永遠のいのちは、罪の赦しを得させるための葉のようなものではありません。永遠から神様が予定されていたことなのです。

消極的な面と積極的な面

もう一度聞きます。救いにおける神のご目的は、いったいどういうものなのでしょう。何のために、主なる神は人を救う必要があったのでしょうか。

広い所があるのです。その永遠からのご予定は実現されていかなければなりません。そしてこの神のご計画は、罪と何の関わりもないものなのです。

あまり良い例ではないかも知れませんが、ドイツに面白い童話があります。ある所に一人の洋服屋さんがいてパンを食べていました。パン皿の上に七匹の蠅はばがとまっていたので、それを見た洋服屋さんは新聞紙を丸めて蠅の上に振り下ろしたのです。すると、七匹ともいっぺんに死んでしまいました。彼はそれから、「一撃でいっぺんに蠅七匹を殺した男」と書いた看板を背中になぶらさげて世界中を練り歩き、恐れられ、素晴らしく成功したという話です。

神は、御子イエス様の死によって人間の罪を赦し、私たちを罪の力から解放されただけではありません。この一撃でもって、多くのさらに素晴らしいこと、すなわち永遠からのご予定が成し遂げられたのです。

しかし残念なことに、多くの信者は主イエス様の死

イエスの救い(6) 神の永遠からの予定

二つのことが言えると思うのです。いわゆる消極的な面と、積極的な面です。消極的な面というのは、アダムが失ったものを回復するため、もと通りにするためです。また悪魔の業を滅ぼすために、救いが必要でした。しかしそれだけではなく、積極的な面として、主なる神の永遠からのご予定が成し遂げられるためにも、救いが必要だったのです。

私たちは今日まで何度も繰り返し、救いが必要な理由について学んできました。それはアダムが失ったものを回復するため、すなわち、人類の罪が尊い主の血潮により贖あがなわれ、古い人が十字架につけられ主とともに死に、アダムだざいの墮罪以前の状態に回復される、という事実を学んできたのです。

主イエス様の血潮と十字架は、アダムによって失われたものを回復する手立てでした。この罪を贖う血の力、罪から解放する十字架の力を、自ら体験した人はほんとうに幸いです。

しかし、神様のご計画は、さらにそれを越えた先に

により、主なる神の永遠からのご予定が成就したというこの事実を知らないでいます。

実に父なる神の底知れず計り知れない知恵と、御子主イエス様の御救いを思う時、上からの光によってそれを知る時、ただ御前にひざまずき礼拝せずにはおられなくなります。

私たちの罪が赦され、古い人の力が抹殺まっさつされること、それよりもさらにいっそう広く偉大な主なる神のご予定が続いています。主なる神は御子を多くの兄弟たちの長子ちゅうしになそうとされ、多くの神の子を求めておられたのです。ですから神は、自らのいのちを差し出されました。

主イエス様が十字架にかかり、さばかれ、私たちの罪の負い目を自ら負われ、私たちの古い人の力を抹殺されました。そればかりではありません。十字架にかかり、自らのいのちを死に渡されたのです。

ですから主イエス様の死は、アダムが失ったものを

回復するため、すなわち罪の赦しと、罪の力からの解放だけではなく、自らのいのちを与えることにより、人類に永遠のいのちを得させるための死であったと言えるのです。

エペソ人への手紙5章25節に「キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように」と書いてありますが、これはイエス様の死の積極的な面です。主イエス様は私たちの罪の赦しと、罪の力からの解放のために亡くなられたばかりではなく、私たちの永遠のいのちのためにも亡くなられたのです。

この事実をしっかりとつかむために、最後に四つの例話によって考えてみたいと思います。

(1) アダムから取り出されたエバ

第一番目は、アダムが眠らされてエバが造られたこととです。創世記2章を見てみます。

そこで神である主が、深い眠りをその人に下されたの

で彼は眠った。それで、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。こうして神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。すると人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」

(創世記 2:21-23)

エペソ人への手紙5章には次のように書かれています。

夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。(エペソ 5:25-27)

教会とは何かと考える時、それは救われた罪人の集まりであり、その裏には罪が大きな場を占めていると、私たちは考えます。けれども、神の目から見た教会は違います。教会は「神が御子から取り出したもの」であり、これは神が永遠の昔からあらかじめ定められていたところのものであり、罪の影すら見えない、罪とは何の関わりもないものなのです。

私たちは今までの学びを通して、主イエス様の死が、罪に陥り、神なく望みなく歩む者のため、また神に敵対する者のためであったことがわかりました。

しかし、先ほどのエペソ人への手紙5章25節を見ると、イエス様の死は罪のためだけではなく、違ったご目的のためでもあったということがわかります。

「キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられた」と書いてあります。この主なる神の愛を、御霊様は夫と妻の愛にたとえています。エペソ人への手紙5章には、イエス様が罪のために亡くなられたことについては書いてありません。教会を建て上げられるた

めに、ご自身をおささげになったことが書いてあります。これを説明するために、パウロは創世記2章を取り上げたのです。

もちろん創世記3章以下を読むと、神はアダムとエバの罪をおおうために動物を殺し、その皮の衣を着せたことが書かれています。引き続いて、アベルとカインのささげ物の問題、また多くの動物がいけにえとしてささげられたことが書かれています。これらはみな主イエス様の死が罪人を赦し、きよめるためであったことを象徴しています。すなわち主イエス様は、罪人のために亡くなられたという面を語っています。

しかし主イエス様の死は、罪のためだけではなく、たとえてくれる箇所が、旧約聖書の中にあります。それがアダムの子孫の前、創世記2章です。そしてパウロは、御霊の導きによってこの創世記2章を例にとりました。

神はアダムを眠らせました。もし私たち信者が死ぬと、聖書はその死に対して「死んだ」という言葉を使い

イエスの救い(6)

神の永遠からの予定

ません。「眠った」という言葉を使います。信者は罪を赦され、永遠のいのちを持っていますから、死んだと言わずに眠ったと言います。アダムの場合がそうでした。アダムが罪を犯す前のことでしたから、眠ったと言っているのです。神はアダムを眠らせました。罪を犯したからでしょうか、そうではありません。アダムはその後で罪を犯したのです。またエバが罪を犯したためにアダムは眠らされたのでしょうか。いいえ、その時にエバは、まだ造られていませんでした。眠らされたのは、アダムから何かを取り出して、新しいものを造り出すためでした。神はアダムから妻のエバを造り出すために、アダムを眠らせました。

アダムの眠ったことは、イエス様の死を象徴しています。主なる神は、御子イエス様に花嫁を与えるために、御子イエス様を十字架で眠りにつかせたのです。もちろん、主イエス様の死は救いのためでもありません。しかし救いは罪の薬にすぎません。救いは、アダムが後に罪を犯したから必要となったのです。しかし、

主なる神の永遠からのご予定は、人を罪から救い、もと通りにするといったことだけではありませんでした。多くのクリスチャンは、消極的な面での救いだけを考えて、人間は救われるために造られたかのように考えています。

アダムは永遠のいのちを得させるいのちの木の実を食べませんでした。ですから永遠のいのちを持っていませんでした。創造の時に与えられたいのちしか持っていなかったのです。ですから、たとえアダムが罪を犯さなかったとしても、イエス様は、どういう方法によつてかわかりませんが、人類に永遠のいのちを与える必要があつたはずです。しかしアダムは罪を犯しましたから、アダムが罪を犯す前に必要だったものに加えて罪の赦しも必要になったわけです。

主イエス様は、自らいのちを与えることにより人類の罪を赦し、それに加えてアダムが罪を犯す前に必要としていたもの、すなわち永遠のいのちまで、同時にお与えになりました。驚くべき神のみわざです。です

から信者は、墮罪の前にアダムが持っていたものよりもっと多くのものを持つているわけです。

キリスト者は永遠のいのちと、神の子であり、イエス・キリストの兄弟であるという立場、これらすべてのものを持つているわけです。

アダムは、エバが生み出されるために眠らされました。エバはアダムと全く別なものとして造られたのはありませんでした。アダムの体から取り出されました。同じように、主イエス様は死に、教会とともによみがえらされたのです。

教会は、イエス様から取り出されたものです。主イエス様は十字架につき、自らを死に渡されましたが、それは傷もしみもない教会を、着飾った花嫁として生み出すためにそうされたのです。

(2) 一粒の麦

今まで、アダムとエバについて考えました。次は二番目の例として、一粒の麦が死んで多くの実を結ぶこ

と、このたとえを使って考えてみたいと思います。ヨハネの福音書12章にイエス様の次のみことばがあります。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。

(ヨハネ 12:24)

この一粒の麦とは誰のことでしょうか。言うまでもなく主イエス様のことです。神の永遠のいのちは、神のひとり子である主イエス様の中にだけあります。そしてこの一粒の麦は、土の中に埋められて死んでしまいました。どうしてでしょうか。

それは、他の多くの麦を生み出すために一粒の麦は死んだのです。一粒の麦である主イエス様は、人間を贖い、罪の赦しを得させるために十字架で死なれただけではありません。多くの実をみのらせるために、自

らを死に渡されたのです。一粒の麦の死は、他の多くの実を生み出すためでもあったのです。キリストは教会を愛して、そのためにご自身をさげられたと聖書に書いてあります。

一粒の麦は、死ぬことにより多くの麦粒の中で、第一の麦粒となりました。ひとり子主イエス様は、死ぬことによって多くの兄弟たちの長子とされました。この事実は、ヨハネの福音書1章と20章を見てみるとよくわかります。

ことばは人となつて、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。
(ヨハネ 1:14)

ここで、父の「ひとり子」とイエス様は呼ばれています。その後20章までの間にイエス様は死んでよみがえられたのです。よみがえられたイエス様はマリヤに

会ってこう言われました。

イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上つていないからです。わたしの兄弟たちのところに行つて、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。」
(ヨハネ 20:17)

1章からずっと、イエス様は父なる神を「わたしの父」と呼んでこられました。死とよみがえりの後では、「あなたがたの父」と呼んでいます。また、信者を「わたしの兄弟たち」とお呼びになりました。すなわちひとり子なる主イエス様は長子とされたのです。父なる神はいまや多くの子をお持ちになり、御子イエス様は多くの兄弟をお持ちになったのです。主イエス様は「わたしの兄弟たちのところに行つて…告げなさい」と言われたのです。またヘブル人への手紙には「主は彼

らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、こう言われます。」
(ヘブル2:11)と記されています。

(3) 火のように燃えるキリストの霊

三番目は、主イエス様が十字架のバプテスマを受けられ、火が投じられたことです。ルカの福音書のイエス様のことばを見ましょう。

わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです。だから、その火が燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう。しかし、わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょう。
(ルカ 12:49-50)

と書いてあります。主イエス様が来られたご目的は、私たちの心の中にイエス様の霊が火となって投じられるためでした。しかし主イエス様が肉体のかたちをとっておられた時、イエス様の代行者、御霊様は地に

おられませんでした。「わたしには受けるバプテスマがあります」と言っておられますが、これはイエス様の死を意味しています。

これを考えると、イエス様の死は人類の贖いだけではなく、人間の心にご自身の霊を火として降り注ぐためであったことがよくわかります。主イエス様は、死によって肉のかたちのイエス様から、霊のかたちのイエス様とされたのです。イエス様は、いまや私たちとともにおられるイエス様であるだけではなく、私たちの中に住まれるイエス様になられたのです。私たちは、火のように燃えるキリストの霊を受けて神の子となりました。ローマ人への手紙8章にこう記されています。

あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けただのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。私たちが神の子でもあることは、御霊ご自身が、

イエスの救い(6) 神の永遠からの予定

私たちの霊とともに、あかししてください。

(ローマ 8:15-16)

(4) 永遠のいのち

最後に、「人の子の肉はいのちである」ことについて考えたいと思います。ヨハネの福音書6章32節から58節を見ると、よくわかります。主イエス様は「わたしは天から下ってきた生けるパンです」、「わたしを食べる者も、わたしによって生けるのです」と言われたのです。ユダヤ人たちはそれを聞いた時、そんなことはできないと言いました。もつともなことです。肉体のかたちを取っておられるイエス様を食べることは、もちろん不可能です。主イエス様は、ご自分のいのちを与えるために死ななければなりません。イエス様は死とよみがえりにより、誰もが食べて受け入れることができるよみがえりのからだ、霊のからだとなりました。そして、その「肉」を食べ「血」を飲む者は永遠のいのちを持つのです。ヨハネはこのことを述べています。

主イエス様は自らを死に明け渡されたのです。

生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。
(ヨハネ 6:57)

イエス様によって生きるということは、自分ひとりでは何もできない、完全に主に頼り頼まなければならぬということの意味しているのです。

多くのクリスチャンは、良い信者とは強い人々であると考えています。しかし良い信者とは、主によって生きる人たちです。私たちは、強くなるために力を受けるわけではありません。イエス様が、私たちのうちに宿り、住まわれるのです。そうすると「主よ。忍耐をお与えください」、「兄弟を愛する愛をお与えください」と願うより「私は忍耐も愛もありません。うちに住んでおられる主イエス様よ、あなたが忍耐し、あなたが愛させていただきますように」という祈りになります。

イエスの救い(6) 神の永遠からの予定

しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。
(ヨハネ 1:12-13)

と書いてあります。主イエス様は、私たちの生活を改善されるなどとは思いませんでした。ご自身のいのちを私たちに与えたかったのです。イエス様ご自身がこう約束されています。

わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。またわたしを与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。
(ヨハネ 6:51)

主なる神の永遠からのご予定は、人間のうちに永遠のいのち、神のいのちが宿ることでした。そのために、

これが主による生活です。

例えて言えばこういうことです。立派な資産家が結婚しました。その妻は無一物です。しかし夫によって、多くの財産を自分のものとすることができました。結婚により二人は一体となったのです。

創世記2章24節に「それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである」。またエペソ人への手紙5章31節に「それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」とあります。そして続いて32節にパウロは「この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。」と書き記したのです。エバがアダムから取り出され、二人はひとつとなったように、教会はイエス様から取り出され、イエス様とひとつにされたのです。

主イエス様は、聖霊によってマリヤの胎に身ごもられました。「ダビデの子ヨセフ。恐れないであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです」(マタイ1:20)。私たちも同じように聖霊により

神によって生まれた者です。

イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。…」 (ヨハネ 3・5)

この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってもなく、ただ、神によって生まれたのである。

(ヨハネ 1・13)

主イエス様と私たちのいのちの源は同じです。主イエス様が天国で持つておられるいのちを、神様は私たちにお与えになりました。イエス様が、私たちと共におられるイエス様だけではなく、私たちの内におられるイエス様になられたのです。

これまで、生ける神の永遠からのご予定を考えてきました。それは、罪と何の関わりもないということが

おわかりになったでしょうか。主イエス様の死によって、私たちは罪に陥る前のアダムよりも、もつともつと多くを与えられ豊かにされていることがおわかりになったことと思います。罪が赦され、古い人が殺されたばかりではなく、神の持ちたもう永遠のいのちにあずかるものとされたのです。

私たちは永遠のいのちを持つことにより神の子とされ、主イエス様の兄弟とされたのです。主イエス様を受け入れた者一人ひとりが、神の家族の一員とされたのです。

私たちは、もはやこの世に求めるものを何ひとつ持ち合わせていません。この世に望みを置けるものは何もないはずです。試練となる悩みや苦しみを通して、主は私たちの心に天国を慕う思いを起こさせ、完全な者としてくださいます。

主なる神の永遠からのご予定はどういうものなのでしょう。最後に三か所みことばを答えとして読みたいと思います。

神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであつたのです。 (ヘブル 2・10)

夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。…

ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。 (エペソ 5・25、27)

また、私は大群衆の声、大水の音、激しい雷鳴のようなもの、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となられた。私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻こんいんの時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。」

(黙示 19・6〜7)

これこそ主なる神が永遠からあらかじめ定められたことです。主なる神が、これに対して私たちの心の目を開いてくださるなら、ほんとうに幸いです。

本メッセージは、「ロバの子サバー」の「バック兄 暦年ファイナル」に録音されています。

次回掲載予定は、「イエスの救い(7)御霊による歩み」です。

あなたの神に会う備えをせよ

渡部 弥寿志

イスラエル、あなたはあなたの神に会う備えをせよ。

(アモス 4・12)

これは神が預言者アモスに対して、イスラエルの民に語るようにと与えられたみことばです。

「あなたの神」とあるように、神を知らない人々に対してではなく、既に神を良く知っているはずのイスラエルの民への神からのメッセージでした。アモスは預言者として召された人でしたから、単に神を知っているというだけではなく、神の御心を知り、御心を人々に伝える使命を帯びた者として、イスラエルの人々よりも真剣にこのみことばを受け止めたのではないでしょう。見知らぬ神ではなく、個人的に良く知っています。

る神に会う備えとは、何を意味するのでしょうか。私達は既に救われ、救われた当時よりも更により良く神を知っているはずの者として、神に会う備えをどのように進めているのでしょうか。日々、私達はその備えを確かなものとしているのでしょうか。

「神に会う」ことは、イエス様が救いに与った人々を空中まで迎えに来られ、本当に救われた者だけを、一瞬のうちにこの地上から空中へと引き上げられる時に現実となります。これが携挙です。その時、私達は直接顔と顔を合わせてイエス様と対面します。私達はこの地上に於いて、個人的な祈りの中でイエス様と交わり、兄弟姉妹との交わりの中で、お互いの内に住まわ

れるイエス様と出会っています。毎週日曜日には、公に集会や教会で聖書の示すとおり、パンと葡萄酒の二つの形を通して、十字架に架かり信じる者をお救いになったイエス様を覚えていきます。しかし、携挙の時

わたしは、あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの地から導き出した主であるから。あなたがたは聖なる者となりなさい。わたしが聖であるから。

(レビ 11・45)

このみことばには、神がイスラエルの民をエジプトから導き出された目的が記されています。

その目的とは、出エジプト記から申命記にかけても詳しく記されているように、イスラエルが神を礼拝する民として聖められ、相応しく整えられてゆくことです。神は新約時代の私達に対しても同じ目的を持って、私達をこの世から選び出し、聖なる神を礼拝するに相応しく訓練し、聖め、整えてくださるのです。ヨハネの福音書17章には、イエス様がローマの官憲に捕えられ、十字架に架けられる直前の祈りが一章を費やして記されています。イエス様が父なる神にささげられた祈りを要約すると「信じる者が一つとなるために、更には栄光に輝くイエス様と一つになるために、信じる者を

あなたの神に会う備えをせよ

この世から聖め別ち、聖なる者としてください」という祈りです。ヨハネによる福音書17章には、神が旧約時代に預言者によってお示しになった、選びの民イスラエルを礼拝者として聖め、整えてゆくこと以上の更に遠大な、新約時代の私達に対する神のご計画が隠されています。私達が聖なる者とされること、すなわち聖化は神の私達に対する最大の関心事であり、聖書の重要なテーマでもあります。神は私達に対して「聖なる者になりなさい。」と命じておられるのであって、「立派な人になりなさい。品行方正な人になりなさい。」と命じておられるではありません。私達が礼拝者として神様の聖さに与り、更にキリストに在って一つとなるために、整えられてゆくことはとても重要です。

ところで神の聖さとは、どれ程の聖さなのでしょう。それは、私達人間が考えうる程度の聖さではありません。神の聖さは人間の想像を遥かに超えています。原語のギリシャ語では「ハギオス」と言い、人間から隔

い、十字架の上で身代わりとなり死ぬ事によって、私達を赦し受け入れてくださったのです。マタイの福音書27章51節には、イエス様が十字架に架かり息を引き取られた時、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた事が記録されています。この十字架の御業によって、神と人間を隔てていた、隔ての幕は永久に葬り去られたのです。これらの事に思いを致す時、私達はイエス様が成し遂げられた十字架の御業が、どれほど貴重なものであるのか益々知り得て、感謝せざるを得なくなるのではないでしょう。

聖化は私たちが救われた時から始まります。厳密には、私たちがイエス様を信じ救われた瞬間から始まります。イエス様が聖霊を通して私達の内に働き、栄光のイエス様に相いまみえるための備えと御国に入る準備を開始されるのです。ですから私達は、イエス様が聖霊を通して私達の内に働かれることを許容し、受け入れ続けることがどうしても必要になります。イエス

あなたの神に会う備えをせよ

絶した聖さ、神と人間との間に断絶を生じさせる程の聖さを意味します。それを象徴しているのが、旧約時代の幕屋、並びに新約時代の神殿において、聖所と至聖所を隔てていた隔ての幕です。例えば人間を真つ黒な存在になぞらえると、黒から次第に灰色になり、やがて真つ白な存在の神に到達するというようなグラデーションを描いて、人間が神に繋がるのではありません。神は、小さな染みのような罪でさえも見過ごす事がおできになりません。神と同じ聖さを持つ者でなければ、神に受け入れられることは決してありません。神は全知全能のお方ですが、ただ一つおできにならないことがあります。それは、罪を犯す事です。この現実を前に、私達は神の聖さと、自分の考える聖さとのあまりの隔たりに絶望する他はありません。その絶望の中にある人間に対して、神は救いの手を差し伸べられました。それが十字架の御業です。神は私達の罪を見過ごすことによって、私達を赦し受け入れてくださったのではなく、イエス様が私達の罪を全て背負

様は日々私達の内に働いて、私達を礼拝者として相應しく整え、聖なる者へと変えてくださるのです。

あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そして、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。

(1コリント 6:9-11)

私達は自分の抱える問題や、目の前に起きる出来事に心を奪われがちですが、私達の内に働かれるイエス様に目を向ける事が大切です。神は、私達の抱える悩みや問題を見過ごしにされることは決してありません。

しかし神は、私たちの抱える悩みや問題を解決することよりも、私たちを聖なる者とすることを最優先になさいます。時と場合によっては、私たちを聖なる者とするために、敢えて試練の中に置かれることがあります。けれどもその試練は、終わりのない試練ではありません。神は私達を耐えられないような試練に遭わせられることは決してありません。ちょうど医師や看護師が、入院患者の体調を毎日、注意深く観察して適切な治療を施しているように、試練の中にある私たち一人ひとりに注意深く目を注いで、日々見守ってくださっています。医師や看護師は、自分を信頼しない患者を適切に治療することができません。同じように神は、救われて尚、ご自身に疑いを抱く者、半信半疑の者、すなわち不信仰な者に対して、導きと祝福を与える事がおできになりません。ですから、私達は全てを主に委ね、日々主に信頼し続ける事が大切です。ヘブル人への手紙3章6～19節にも警告されているように、主の前に頑なであってはなりません。

神があなたがたに望んでおられることです。

(1テサロニケ 5:16～18)

私達が聖なる者とされてゆく過程に於いて、必ず賛美と祈りと感謝が私達の内側からいのちの水の川のように溢れ出てきます。もし、賛美も祈りも感謝もないキリスト者がいるとすれば、その人は本当に救われていると言えるのでしょうか。「いつも喜んでいなさい。」の主体はイエス様です。ですから、このみことばは「いつも主を賛美しなさい。」と言い換える事ができます。神をほめたたえることはとても大切です。次に「絶えず祈りなさい。」とあります。祈りの大切さは私達が何度も聞いて学んでいるところです。けれども私は本当に祈っているのだろうか？ 祈っているとしても、私の祈りは主の前に充分だろうか？ 私の祈りの多くが、自己中心的な祈りに終始していないだろうか？と自問自答することがあるかもしれません。これらの問いが、人との比較や自責の念からではなく、み

あなたの神に会う備えをせよ

聖化は内住の聖霊を通してイエス様が成してください。御業ですが、私達は聖なる者とされるために何もしなくて良いのでしょうか。結論からすると、私達は何もしなくて良いのです。私達は、努力をすれば多少は清く立派な人間になることができるかもしれません。或いは、世間から認められるような一角の人物になることができるかもしれません。しかし、それでさえも大変難しい事です。

ましてや神の聖さに与り、神と等しく聖なる者となることは、一大決心のもとに、いかなる努力や修行をしたとしても不可能です。なぜなら、神の聖さはこの世から隔絶した聖さ、ハギオスであるからです。私達が、日々聖なる者とされてゆく聖化は、私達人間と神との共同作業ではありません。神の私達人間に対する一方的な働きです。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって

ことばから導き出された問いであるならば、その人の成長の証しであり、イエス様がその人の内に確実に働いて、聖なる者へと変えてくださっている何よりの証拠です。祈りの本質は、主と交わり、主を喜び、その素晴らしさのゆえに神をほめたたえ、感謝することにあるのではないのでしょうか。たとえ神が私の為に何一つしてくださらなかったとしても、神は神です。神は絶対的な存在です。神が私たちの為に存在しているのではなく、私達が神の為に存在しているのです。神は創造主であり、私達人間は被造物です。この立ち位置を踏み外しては、私達人間が神と正しい関係を結ぶことはできません。また、主を喜ぶことも、感謝することもできません。神と人間との関係を親子の關係に例えると、幼子は親が傍に居てくれるただそれだけで嬉しく安心できる。親は、わが子が側に居てくれさえすれば幸せである。これは、相手に何かを期待する利害関係ではありません。また、お互いに依存するだけの甘ったれた関係でもありません。純粹に、相手の存在その

ものを喜ぶ愛（アガペー）の関係です。この関係が一方通行ではなく、お互いに通うものであれば、どんなに素晴らしい事でしょうか。日々の祈りを通して、イエス様は私達にこのような交わりを望んでおられるのです。そして、この祈りと賛美が、兄弟姉妹と共に公になされるのが礼拝です。主への賛美と祈りと感謝によって、私達は更に主をより良く知り、賛美し、全ての事に對して感謝するようになります。これらの事は、日々私達が聖なる者とされている現われです。自分では気が付きませんが、イエス様は聖霊を通して確実に私たちの内に働いてくださるのです。とりわけ私達は、イエス様が聖霊を通して兄弟姉妹の内に働かれ、その兄弟姉妹が神を賛美し、或いは悔い改めて、神の御前にへりくだる姿に接する時、すなわち兄弟姉妹が聖められ、成長してゆく姿を見せて頂く時、自分のこと以上に、心から主を喜ぶことができるのではないのでしょうか。

それでは、神は具体的に何によって私達を聖めてく

みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしつかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につづこうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもつて、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。しかし、あなたは、どのようなばあいにも憤み、困難に耐え、伝道者として働き、自分の務めを十分に果たしなさい。

（2テモテ 4:2-5）

このみことばを読むと、私達は福音を伝える為に一生懸命に頑張らなくてはならない。努力しなければならぬ。犠牲を払わなければならない。というような何か追い立てられるような思いになるかもしれません。しかし、そうではありません。5節に「自分の務めを十分に果たしなさい。」とあるように、私達は神から与えられた賜物に應じて、福音を伝えるように命じられて

あなたの神に会う備えをせよ

くださるのでしょうか。

真理によって彼らを聖め別つてください。あなたのみことばは真理です。
（ヨハネ 17:17）

イエス様の祈りが示すように、神はみことばによって私達を聖めてくださるのです。ですから、私達は聖書を読み、みことばを心に蓄えることが大切になります。みことばは、私達の成長に欠かせません。

生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。あなたがたはすでに、主がいつくしみ深い方であることを味わっているのです。

（1ペテロ 2:2-3）

最後に宣教について触れます。

いるのです。

宣教は言葉だけによるものではありません。伝道者とは、聖書に精通して何か特別な能力が与えられた人のように感じるかもしれませんが、救われた人は全て伝道者です。決して特別な人のことではありません。そもそも私達が救いを受けた時、なぜ神は私達を直ぐに天に引き上げてくださらなかったのでしょうか。それは、私達を通して福音を宣べ伝える為であり、宣教の御業を通して私達を訓練し、聖なる者としてくださる為です。福音を伝える上で最も大切な事は、福音を伝えようとしているその人自身です。もし、その人が本当に救われていなければ、福音らしきことを語ったとしても何の役にも立ちません。それどころか大きな躓きとなります。たとえ口下手であったとしても、何かの理由で寝たきりになったとしても、その人が真に聖められた人であるなら、神はその人を用いて福音を伝えてくださるのです。換言すれば、神が私を聖め続けてくださることを継続して受け入れるなら、神はその



幸さんと

カナダ人放蕩息子^{ほうとう}の証し

チャールズ・ランメル

人を用いて大いなる御業を現わしてくださいさるのです。十九世紀、中国の奥地伝道に遣わされたハドソン・テラーという宣教師がおられました。彼が東奔西走^{とうほんせいそう}、福音を伝える為に頑張っていた時には、福音が思うように伝わりませんでした。しかし、彼が疲労困憊^{ひろうこんばい}し病に倒れ、何もできなくなった時に初めて福音が大いに前進したのです。彼にとつて、病に倒れ何か月も動けなくなった月日は、とても辛い経験であったに違いありません。けれども彼は、病の中で自分の無力さに絶望した時、神に全てを明け渡すことができました。神は、この試練を通してハドソン・テラーを聖め、大いに用いられたのです。

御霊を消してはなりません。預言をないがしろにしてはいけません。すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。悪はどんな悪でも避けなさい。平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のと

き、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだが完全に守られますように。あなたがたを召された方は真実ですから、きつとそのことをしてください。

(1テサロニケ 5:19-24)

わたなへやすし
渡部 弥寿志 (広島キリスト教会)



幼いころ

私は一九三九年九月一日、第二次世界大戦が勃発した日、カナダのウエストバンクーバーで生まれました。父の両親はドイツ人とデンマーク人です。母は、スコットランド人の父親とイギリス人の母親の間に生まれた八人兄妹の三番目で、アメリカ生まれのアメリカ人。一九三〇年、母の一家はアメリカからカナダに移住し、母はブリティッシュ・コロンビア大学で看護婦の資格をとり、職についていた時、父との出会いが与えられカナダ人となりました。私はこのような多民族の血が混じり合ったカナダ人です。

娘は日本人の血が入った日本生まれのカナダ人で、孫たちはそれらの血が混じった「五目カナダ人(笑)」です。我が家の家系を例にとりましたが、このようにカナダは世界の二百五十か国の移民から構成される多民族主義の社会です。公用語は英語とフランス語ですが、家では自国語が話され、それぞれの国の文化、風俗、

習慣、宗教が守られています。

旧約聖書の創世記でヤコブがハランへの旅の途中で、石を枕にして見た夢は、主の祝福が世界中に広がっていくという夢ですが、それとは対照的にカナダは世界中に散らばっている民族の中から人々が集まっています。

あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西、東、北、南へと広がり、地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫によって祝福される。

(創世記 28・14)

私は五歳のころから、姉妹三人とアングリカン(聖公会)教会のサンデースクール(日曜学校)に通っていました。約三キロの行き帰りの道は三姉妹が私の後ろについて歩いています。それは私が三姉妹が目を離した隙を狙って、子供用の聖書を道路脇の茂みの中に放り投げるからです。遊び盛りのやんちゃ坊主にとって、

説教や祈りは我慢ができないほど退屈でした。

けれども、ホーソン牧師が語られたイエス様の数々の奇跡の話は、スリルあるミステリーでした。中でも羊飼いのダビデがベリシテ人の大男ゴリヤテと戦う時の様子です。ホーソン先生は砂漠の挿し絵を見せて、二人の格闘の様子をドラマティックに説明してくれました。ちょっと弱々しく見える少年のダビデと完全武装をして自信たっぷりに立っているゴリヤテ戦士。サウル、ダビデ、ゴリヤテの会話を声色を変えながら話してくれます。聞いている子供たちは、まるでその場において目撃者になった気持で怖がったり、悲しんだり興奮しています。ダビデが、神様はいつしよにいてくださると信じて、怖がらないで、勇気をもって石つぶて一つで大男を殺した話は、神を信じる原点として私の心に残っています。

サウルはダビデに言った。「あなたは、あのベリシテ人

のところへ行って、あれと戦うことはできない。あなたはまだ若いし、あれは若い時から戦士だったのだから。」

(1サムエル 17・33)

ついで、ダビデは言った。「獅子や、熊の爪から私を救い出してくださった主は、あのベリシテ人の手からも私を救い出してください。」サウルはダビデに言った。「行きなさい。主があなたとともにおられますように。」

(1サムエル 17・37)

小、中、高校時代(一九四五―一九五八年)

小学校高学年になると、授業の始まる前に、国家斉唱に続いて聖書の輪読がはじまります。女の子はまじめですが、男の子はゆっくりと読みます。途中で「もう一度読んで」と、じゃまを入れたりして、聖なる聖書の時間はふざけ半分でした。宿題や質問、テストも無く、生徒はリラックスできる唯一自由な時間でした。

中学に入ると両親は子供たちに教会に行くことを強制しなくなりました。私は代わりにボーイスカウトに入団、またアルバイトで新聞配達をはじめました。

一九五五年、ボーイスカウト第八回世界大会がナイアガラで開催され、私は新聞配達で貯めたお金で参加しました。ナイアガラまで車で五日間の旅でした。大会は世界七十一か国から一万一千人のスカウトが集まった大規模なもので、それぞれのグループが平原でテント生活をしました。

三日目の夜、突然ハリケーンに襲われ、大雨と大風が吹きまくって、集中豪雨の中でテントは飛ばされ、空から地上へと暗闇を貫く稲妻と雷鳴。樹木はバリバリと音を立てて引き裂かれ、まるで戦火の中にいるようです。

どこかのグループで祈りがはじまりました。私たちはテント村に流れこむ水を防ぐため、土手を造る作業をしましたが、積み上げた土はすぐ流され、あたり一面

海となります。衣類、食料品、靴などがぶかぶか浮いています。泣きそうになりながら、祈ったり、「怖くない」「頑張れ」と叫びながらそれぞれの作業をしました。

翌朝は澄み渡る青空が広がり、暖かい空気の中、寝袋、衣類、食料品などを太陽の下で乾かして、湿気たパンを食べましたが、誰も文句を言いませんでした。ノアの箱舟のような大自然の厳しさを知った思い出です。

水はいよいよ地の上に増し加わり、天の下にあるどの高い山々も、すべておおわれた。
(創世記 7・19)

最終日の日曜の朝、黒人牧師のメッセージと祈りがありました。彼の話は響き渡る声で熱がこもっていて、震えるような怖さと温かさ、愛があり、我々若者の心を引きつけました。「私には夢があります。あなたがたも夢があるでしょう。熱心に神に祈ってあなたの夢を実現しましょう。Be prepared (備えをしなさい)」と

いうような話でした。
一九六三年、マーティン・ルーサー・キングの有名なスピーチ「I have a dream」の中で話されたメッセージを聞いたとき、もしやあの時の黒人はキング牧師ではなかったかと今になって思われます。

日本へ留学

一九五九年。十九歳の私は、交換留学生として東京大学に留学しました。

東大の門をくぐった初日のことです。校内に詰襟の黒い学生服を着た群れを見て唖然としました。「これは何事だ！ この大学は牧師になるための宗教大学だったのか！」。

カナダの大学は制服がなく、詰襟の黒い服を着ている人は牧師と決まっていました。えらいことになった、私の脳裏に両親の当惑した顔が浮かんできました。教会嫌いの息子が、なぜ心変わりをして、牧師になりました

くなったのだろうか。親戚中の話題になるだろう…。

「経済を学ぶために留学したのに、取り返しのかない失敗をしてしまった」と数日悩みました。また私の周りが日本人ばかりというのも不思議なことでした。

高度成長期の一九六〇年代の日本は世界中で、もっともエキサイティングな国であったと思います。私は大学の休みになると日本中を歩き回りました。

冬休みは芭蕉の『奥の細道』にあこがれて、東北を徒歩とヒッチハイクをしながら、無銭旅行のような旅をしました。寝泊りはお寺の境内や、交番の仮眠室を借りたり、行き当たりばつたりの冒険でしたが、毎日の寝る場所と、時には食事さえも与えられました。目的地は北海道の最果て稚内です。

函館では、山の美しさに見とれ、故郷の山に似ているなど、足は自然と山に向かいました。終日歩き続けてたどりついた村外れの空き家ですが、鍵がかかっています。ドアをガタガタ押ししたり引いたり、こわさな

いようにと注意しながら試してみましたが開きません。そのうち手を横に滑らすと、スーと開きました。日本の戸は横に開くのです。

ストーブに薪をくべて暖まっていると、故郷の風景が浮かんできました。…今日はクリスマス、家族、親戚のにぎやかな集い、丸焼きのターキー、クリスマスケーキ、プレゼントを開けるときの胸のときめき…。でも私は雪深い山里の小屋で唯ひとりのクリスマスです。イエス様はここよりもっと貧しい馬小屋でお生まれになった。でもイエス様の周りには彼を祝福する人々が集まっていた。我が生涯で初めて孤独を感じたクリスマスでした。

翌日、疲れた足を引きずりながら雪の降る名寄を歩いていると、めったに通らないトラックが来ました。ヒッチハイクの私を乗せてくれたトラックは、しばらくしてある家の前で停まりました。運転手は家に入り、すぐ外国人と一緒に出て来ました。「Welcome, I

am Hewlett (やうこそ。ヒューレットです)」と挨拶されたのは、カナダ人の牧師です。運転手は私に無言で別れの握手をしながら「あんたをいい所に『配達して』あげただろう」というような笑顔をして、去って行きました。

その夜、「残り物だけ」と、クリスマスディナーをご馳走してくださいました。まるで夢のようです。ろくな食事をしていなかったので、ターキーディナーは嘔む時間もどかしく、のみ込むように平らげました。家族の人と英語で会話、天国にいるような気持ちでした。

Hewlettさんは稚内に住んでいる牧師に紹介状を書いてくださり、次の宿は決まりました。しかし雪に埋もれた村は家も道もわからず、鉄道の路線を頼りに歩くしかありません。鉄橋は雪がうず高く積もり、もし足がはまったら落ちてしまいます。汽車にひかれそうになったり、海岸でロシア人とまちがえられたり、魚雷を踏みそうになったり、一メートル先も見えない吹

主よ。私は知っています。人間の道は、その人によるのではなく、歩くことも、その歩みを確かにも、人によるのではないことを。

(エレミヤ 10・23)

旅のためには、杖一本のほかは、何も持って行つてはいけません。パンも、袋も、胴巻きに金も持って行つてはいけません。くつは、はきなさい。しかし二枚の下着を着てはいけません。

(マルコ 6・8～9)

私の青春は、両親のもとを離れ、金も食料もほとんど持たないで貧乏旅行に出た、あたかも新約聖書に出てくる放蕩息子の子のようでした。

「聞く」ことから始まった私の信仰

(ベックさんとドイツ喜びの集い)

二〇〇九年、「ドイツ喜びの集い」へ、妻の幸について行きました。ベックさんは「幸は洗礼を受けたけど、

雪の中を歩いて、紹介された牧師の家にたどり着いたのは真夜中でした。

教会の戸は鍵がかかっていません。みんな眠って真っ暗です。二階に上がってみると、そこは牧師の寝室でした。真夜中の突然の侵入者にどんなにびっくりされたか：想像してください。

若い男よ。若いうちに楽しみ。若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心のおもむくまま、あなたの目の望むままに歩め。しかし、これらすべての事において、あなたは神のさばきを受けることを知っておけ。

(伝道者 11・9)

あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。

(イザヤ 30・21)

チャールズは？」と聞かれました。小さいときに洗礼を受けた記憶はありません。またベックさんは「聖書のことばを聞くといひですね」とも言われました。「聞く？」「何で？ 聖書は『読む』のではありません。一瞬思う思いましたが、『Listen』と『Hear』の違い、聖書は神のことばということもわかっていない無知な私を、ベックさんはちゃんとご存じだったのでしよう。聖書は真理であることに目覚めさせられたのでした。

聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。

(申命記 6・4～6)

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永

遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からの
ちに移っているのです。…死人が神の子の声を聞く時が
来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるの
です。

(ヨハネ 5・24～25)

二〇一〇年、御代田で洗礼を受けました。ある兄弟
が「チャールズをグリーンと深く沈めてください」と言
うと、ベックさん「では殺しましょう(笑)」と言われた
のです。私はその意味がわからなくて、なんと残酷な
ことと思いました。

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによつ
て、キリストとともに葬られたのです。それは、キリス
トが御父の栄光によつて死者の中からよみがえられた
ように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするた
めです。

(ローマ 6・4)

以来、朝のデボーション(神の前での静思)は聖書か
らはじまります。

質素な山小屋

現在五年前に購入した糸杉林の中にある古キャンビン
(築百年)を一人で改築中ですが、電気はなく携帯も通
じない場所です。大樹を倒し、道をつけたり、はしごを
かけて上ったり下りたり、もしげがをしたらどうする
のかと幸は心配しています。私は「主イエス様を守つ
てくださっているから安心だ」と確信しています。

孫たちが小さな木の十字架を作ってくれました。それ
は糸杉の木切れをのこぎりで引いて、十字に重ねた真中
に一本釘を打っただけのものです。イエス様の流された
我々の罪の贖いの血が絵の具で塗られていました。

孫娘二人は二〇一二年、ベックさんより祝福式をし
ていただき、信仰の種が少しずつ育っています。でも母
親(タミ)は無神論者、父親(エッサイ、Jesse)はアング

リカン(聖公会信者)ですが、今は主から離れています。
ある時、孫の一人エミが「Mom, Why don't you be-
lieve God? It is so easy to believe Him, It is free...

(ママ、どうして神さま信じないの。神さま信じるのは
簡単よ。ただなんだし...)」。もう一人の孫のカオリは
カオリで「While I am praying in a bed, I will sleep
... (ベッドで祈っているうちに眠くなって...)」

二人は遠くに住んでおり、たまにバンクーバーキリ
スト集会の礼拝や近くの教会に連れて行きますが、そ
こで学んだことを日常生活の中で「All mighty God,
please help... (全能の神さま、どうか...)」と祈ったり、
学校の行事に必要な物をおこづかいから買ったりして
います。幼子は本当に素直に神様を受け入れるとい
うか、主の御心がしみとおるように自然に入っていくの
ですね。

ちやつとこのとき、イエスは、聖霊によつて喜びにあふ

れて言われた。「天地の主であられる父よ。あなたをほ
めたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者
には隠して、幼子たちに現わしてくださいました。...

(ルカ 10・21)

コロナで閉ざされた二〇二〇年のクリスマスは、こ
のキャンビン(小屋)でドイツ系クリスチャン夫婦と主を
賛美し、聖餐にあずかり、主のご生誕を祝いました。彼
らはドイツ語がわかるので、『日々の歌』(キリスト集
会が使われている賛美歌集)から、お互いに知っている
歌を見つけ、日本語と独語で交互に歌い、聖書は英語
で読み、静寂の中、聖なる主への賛美と祝福の時をい
たできました。そして聖霊様と共に一人ひとりが祈り
に導かれ、Holyな(聖なる)クリスマスでした。

私はキャンビンが後々まで主のために用いられるよう
にと、リタイア後は大工仕事に励んでいます。

もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。 (ローマ 14:8)

洗礼の時いただいたこのみことばをいつも心に留め、感謝と共に主の道を歩む者とされたいと祈っています。

追記

「あなたは牧師さんですか?」。二〇一二年、「町田喜びの集い」に行く途中、突然ある男性から声をかけられました。私が聖書を持っていたからでしょうか。会場に行く途中その人に、私は牧師ではないがキリスト集会に行くことを話し、「いっしょに行きませんか」と誘いました。彼は退職した方で日本史を調べに図書館に行くところでした。死後の話になり、「死んだらなにも残らない、おしまいだ」と彼。私が天国の話をし、結局いっしょに会場に連れて、受け付け

テーブルで、「入場券はいくらですか?」と聞かれました。もちろん無料です。

彼は音楽が大好きということで、会場での賛美の歌をとともうれしそうに聞かれ、またベックさんとも信仰について話をされました。その後のことは主がご存じでしょう。

Charles Rummel (チャールズ・ランメル)

一九三九年 カナダ ウェストバンクーバー生まれ
一九五九年 東京大学交換留学生として渡日、上智大学院卒 (一九七三年)

一九七五年 トロント野村證券入社

一九八九年 ウェストバンクーバー帰郷

一九九一年 福島学院大学他日本の大学で教鞭をとる

二〇〇三年 留学生サポート、温泉探訪 (趣味)

二〇一五年 リタイア

主イエス様の憐れみとお恵み

ランメル・幸

主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦勞は何もそれに加えない。 (箴言 10:22)

はじめに

二〇二一年一月二十日、私は八十四歳の誕生日を迎えました。「あなたが歩んできた人生の中で最大のプレゼントは何ですか?」と聞かれた時、「主イエス様です」と心から歓喜の声でこたえました。

でも、主イエス様を知らない頃は、自分を悲劇の主人公だと思ったり、ある時は父がつけてくれた「幸」の名前のごとく幸せいっぱいと思ったり…。それは「あなたの人生は紆余曲折ね」といった周りの人のことばに揺れ動いていたのです。

私の人生には六つの大きなターニングポイントがあります。

一つ目は一九三七年、私は生まれてまもなく、子どもにいない伯母夫婦にもらわれました。戸籍上の養子



ご家族と、幸さん(右から2番目)

ではなく実子、長女として登録されていたので十四歳まで本当の親だと思っていました。

二つ目は、一九四五年八月六日、私たちの暮らしていた広島に、世界で初めての原子爆弾が投下され、私は父（養父）、叔母ほか親戚の家族の死に遭いました。私も原爆被爆症のひ弱い子どもになりました。

三つ目、一九六五年、日本留学中のカナダ人、チャールズ・ランメル（Charles Rummel、愛称チャック）と結婚。カナダ国籍を取得し、カナダ人となりました。

四つ目、原爆症のため「子どもは生めないだろう。生まないほうが良い。奇形児が生まれる」と医者から言われましたが、主から二人の娘（宝物）が与えられました。五つ目、二〇〇八年、仏教徒からクリスチャンに回心し、ベックさんから洗礼をうけました。

六つ目に、二〇一三年、『忘れないでヒロシマ』を出版。それを機に「原爆語り部」として、平和授業を行なう使命が主から与えられました。

『光を仰いで』としました。また論文として『インドにおける阿弥陀仏信仰の成立について』や『親鸞の信仰過程について』などを書いていきます。私はこれらの書き物を読んだ時、父は「光を仰いで」いたのだ、と思い、「神は光であつて、神のうちには暗いところが少しもない。」（1ヨハネ1:5）というみことばを思い出し、クリスチャンとなった私と実父との唯一の結びつきを見出して心躍りました。

進藤の養父母は私を目の中に入れても痛くないほど、かわいがって育ててくれ、私はわがままな一人娘でした。五歳の時に養母が亡くなり、新しいお母さん（進藤みさを、養父の妻）をむかえ、弟（雄太）が生まれました。雄太がわずか五か月の時です。原爆によって我が家の運命は一転。父が亡くなり、働いたことのないみさを母、祖母、弟、私四人の苦しい生活が始まります。みさを母は病気になる、祖母は亡くなり、余儀なく三

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きつまることはありません。（2）リント 4・8〜9）

進藤家の娘となつて

我が家は仏教徒で、私は毎朝仏壇の前で手を合わせて仏様、ご先祖様を拝んでいました。でもそれは習慣で、お盆や命日に聞くお坊さんのお経やお説教は退屈でした。でも仏様を拝むことは日常生活の自然な流れでした。

会ったこともない実父（好村 春基）は仏教徒で、日本全国を布教して歩き、全日本仏教青年会連盟主事として活動していました。また結核で入院中に著書『光を仰いで』を子どもに残す遺産として書き上げ、私もそのコピーをもらいました。文中に、「仏」というものは人々の慈愛の根源を名づけたものだろう。だからその上の天にある光を仰ぐべきだと述べて、本の題名を

人は、みさを母の実家、山口県の萩に移転することになりました。その時、みさを母から「実はお父さんの遺言で決して言ってはならないと言われたけど、好村の伯母さんがあなたの本当のお母さんなの。（従兄弟と）思っていたのは実の兄二人、妹一人）。だから萩に来なくても、本当の親子と暮らしたら？ 好村のみんなは幸が来るように待っているよ」と話してくれました。従兄弟と違っていた兄から同じ内容の手紙をもらい、一人で庭を歩きながら、どうしようと考えました。病気の母と小さな弟の面倒はだれが見るのだろうか。そして「私しかない」との思いが与えられ、みさを母、弟と共に萩に行きました。

萩では五年間、温かい親族に助けられ、みさを母は元氣を取り戻したのです。幸い私も高校卒業と同時に銀行に就職が決まり、また広島に戻ってきました。

あなたを捨て、あなたから別れて帰るように、私にし

むけないでください。あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます… (ルツ 1:16)

チャックとの出会い

一九六〇年、私は東京に住んでいる好村家(こうむら)に戸籍を移し、広島を離れて大都市での生活が始まりました。

ある日、山手線の電車の中で突然外国人に話しかけられ、英語のわからない私は車内で恥をかいた思いで、つぎの駅で下車し、顔のほてりをさましながら、もうこんな恥ずかしい思いはしたくないと、英会話と英文タイプを習い始めました。そして初歩のタイプしか打てないのに、英文タイプリストとして再就職が決まりました。そんな時、会話学校にゲストで現われたのが、日本に留学中のチャック・ランメルでした。

偶然にも彼の両親が、私が勤めている汽船会社の船で日本旅行をかねて、チャックの卒業式に来ると言うのです。以来二人のお付き合いが続きましたが、やが

てチャックはカナダに帰国することになりました。

横浜港にチャックを見送りに行った時、栈橋(さんばし)には、多くの見送り客がいました。船が出航するとき、別れの音楽と共に色とりどりのテープが投げられ、船が進んでいきます。そのとき一本の白いテープが私をめぐって飛んできました。チャックが投げたのです。ほかのテープは絡み合(か)って切れていくのに、そのテープ一本は最後まで二人をつないでいました。一九六三年の真夏でした。

愛は結びの帯として完全なものです。

(コロサイ 3:14)

妊娠「神にはできる」

一九六五年、私たちは当時全国放映の「テレビ結婚式」の番組で式を挙げました。チャックの父がはるばるカナダからランメル家を代表して出席してくれまし

た。姉夫婦もビザの関係でおくれながらも新居に駆けつけてくれました。しかし結婚して三年がすぎても子どもができないので、医者(い)者に診(み)てもらおうと、「あなたは原爆で女性の機能がおかされているので、子どもは生めないでしょう。生んだとしても奇形児の可能性が強いので、生まないほうがいいですよ」と言われました。しかし、奇跡が起こりました。七年後、続けて二人の女の子を授かったのです。

見よ。子どもたちは主の賜物。胎(な)の実は報酬である。

(詩篇 127:3)

神にとって不可能なことは一つもありません。

(ルカ 1:37)

カナダでの生活

日本で娘二人を授かり、一九七五年、チャックがト

ロント野村證券に就職がきまって、カナダでの、私には慣れない生活がはじまりました。家から歩いていけるほどの近くに久保和子さんご一家が住んでいらして、日本人の少ないトロントでの生活ではお互いに心のよりどころでした。けれども久保ご一家は数年後、オランダへご主人の転勤で移られました。

多民族国家カナダでの新しい生活でした。一九八〇年にはカナダ市民権を取得しました。市役所で祝賀式があり、国歌(Oh Canada! Our home and native land …)を合唱していると急に涙が出て、フォルテッシモで(特に力強く)歌うところでは号泣(ごうき)に変わりました。隣の女性が「なぜ泣いているの?」「だって自分の国を捨てたんですもの、あなた悲しくない?」と聞くと、「私はとてもハッピーよ。私の国は戦争でロシアにとられて祖国がないの。カナダが私の新しい国よ」と、答えたのでした。

私たちの国籍は天にあります。

(ピリピ 3:20)

一九八九年、私たちはバンクーバーに転居しました。それはチャックの母の死後、父ががんで病床に臥せっており、長男のチャックは十九歳から五十歳まで実家を離れていたの、最後の親孝行をするためでした。

父を看取った後、チャックは、バンクーバーでは自分に適した仕事が見つからず、単身赴任で日本に行きました。私は十代の娘二人をカナダに残して日本に行くことはできませんでした。

二〇〇八年の奇跡

被爆者の私は「里帰り検診」のため、二〇〇八年一月、広島日赤病院に入院しました。帰日して入院する前、クリスチャンとなられた久保和子さんと二十年ぶりの再会。お宅に泊めてもらい「罪」についての話をしました。

驚きとともに主のご愛を心に刻むことができました。

聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。

(2テモテ 3:16)

主イエス様と歩む道

・聖霊の働き

散歩が好きな私は、娘の愛犬ジェリーを連れて、近くの山林や湖のほとり、海岸を歩いていました。樹齢百年以上の木々の林の中を通りぬけ、溪流の流れに耳を傾け、自生するベリーを食べたり、鹿、熊に出会ったり、森閑とした山道の散歩をしながら自然美に圧倒され、何か見えない物が見たい、聞こえない声を聞きたい、霊的な体験がしたいと思い始めました。海岸に行くと青空の下に輝く波、茜色に染まった夕日を眺め、「このように雄大な自然を創造された創造主はどな

家庭集会にも連れて行っていただき、ベックさんとお会いしました。初めて歌った賛美集『日々の歌』五十八番「理解できないが」は、今でも賛美する時、歓喜と感動で胸が一杯になります。広島へ発つ日、和子さんから『聖書』、『日々の歌』（キリスト集会の賛美歌集）、『日々の光』（みことば集）をプレゼントしていただき、入院中に拝読するよきチャンスが与えられました。

聖書を手にして二か月後、「バンクーバー喜びの集い」でベックさんから洗礼の恵みを授かりました。周りの人たちに「どうしたの、なぜ？」と不思議がられ、私自身もどうしてそうなったのかはつきり答えられません。でも仏教の教えでは得られなかった数々の疑問や納得できない問題に、聖書を読むことで答えをいただいたのです。そのひとつに、仏様ははるかかなた、冥度の世界から守ってくださると教えられましたが、主イエス様は私たちのそばにいらして、生きておられ、絶えず憐れみと恵みを与えてくださっているとわかり、

ただるうか」と自然を賛美していました。聖書は「初めに、神が天と地を創造した。」(創世記1:1)ではじまります。

さらに私が探していた疑問の答えも示されました。

私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。(2コリント 4:18)

信仰のひとつが目に見えない世界を信じることだとすると、私は信仰に入る前から、主イエス様の啓示によって、それらを探していたのです。また目に見えないものに目を留める姿勢こそが霊的な成長の秘訣であると教えられたのも不思議です。洗礼を受けたということで喜んでいた私でしたが、まだまだ霊的な成長からは程遠く、聖書を読み始めたのも聖書は世界のベストセラーだから、一度は読んでみたいという軽い気持

ちからでした。今でも主のみことばをかみしめて食べるにはほど遠い信仰ですが、主イエス様の一方的なみ業わざの中で、今日まで歩ませていただいています。

・私が犯した大罪

長女のリサはロッキーマウンテンの近くに住んでいます。

二〇〇九年のクリスマスは家族五人でリサの家で祝うため、マイナス二十度の山道を、次女の夫の運転で車を走らせました。片道約十時間かけての旅でした。人間の想像を超えた、ことばでは言い表せない自然美、雪をかぶった連山、山道の両側は真っ白い樹氷じゅひょうのトンネルが果てしなく続き、まるで純白の世界に吸い込まれていくようです。主の創造なされた自然美の極限に心打たれました。主はそのとき、私の犯した大罪を示してくださいました。

リサに、「ママはわたしが食事の前に祈っていたとき馬鹿ばかにして笑っていたでしょ」と言われ、覚えても

いなかった罪を光に出され、ぎくりとしました。そうです。ばかにしていたのです。リサは高校生のとき、主イエス様に心をゆだね、友達と教会へ行っていました。いつも食事の前にお祈りをしているリサを、私は笑ったり無視したりしていたのです。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわざの日が来ないうちに、また、「何の喜びもない。」という年月が近づく前に。
(伝道者 12:1)

：兄弟に向かつて『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。

(マタイ 5:22)

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋ひのように赤くても、雪のよう

に白くなる。：

(イザヤ 1:18)

私はリサに、「ごめんなさい、と言っても赦ゆるしてももらえないだろうけど：」と謝りました。彼女は「ママ、人間は成長していくのよ」と答えましたが、赦してあげるとは言いません。リサは独身で、マッサージセラピストとして働いています。今は教会には行っていないが「私は毎日、自然を仰いで、神に祈り、感謝でいっぱいです」と喜んでいます。

私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。このキリストに、栄光が、今も永遠の日に至るまでもありますように。アーメン。

(2ペテロ 3:18)

私は娘リサを通して、主イエス様の多くのみことばを学びました。

・『忘れないでヒロシマ』の出版

「主イエス様、私はどのようにして福音を伝えたらいいでしょうか」と祈っていました。

二〇一二年「浜松喜びの集い」で國川くにがわさんとの出会いが与えられ、新幹線も同じ車両でした。

國川さんは天の御国みくにに旅立たれた奥様であられる雅子さんとの信仰に関するお話を聞かせてくださり、私の方は原爆体験をお話ししました。すると國川さんは私の体験記を日本で出版されたとおっしゃってくださいました。その後、國川さんは主イエス様に祈りながら、ベックさんに前書きを書いていただくよう取り次いでくださいました。カナダに住んでいる私は、日本とのつながりがあまりなく、日本で本を出版するなど、夢のまた夢でした。しかし主イエス様は全ての段取りを國川さんに託されました。また奇しくも久保さんから送られた『光よあれ』（キリスト集会の証し集）の表紙に染野待子さんを見つけ、それをきっかけに

三十五年目に再会した染野さんが校正をしてくださる
ことになりました。

ベックさんが「幸が原爆に遭ったのはイエス様だよ」とおっしゃったことば通り、新生宣教団から二〇一三年に『忘れないでヒロシマ(神は愛なり)』が出版されました。主は被爆者の私とキリスト集会の多くの方々を通して、主のご栄光を現してくださいました。

現在、チャールズと私は『HIROSHIMA Memories of a Survivor』(二〇一三年英語版『忘れないでヒロシマ』の本を元に「平和について」カナダの学校やコミュニティで「平和と核兵器廃止」の話をしています。

私たちは、人の心に小さな平和の種を蒔く活動を、主からいただいた使命として二人三脚で続けてきました。これからは三世の孫二人がこのボランティアを引き継いでくれたらと願っています。

その孫たちの名前は聖書からとりました。Kauri(香里)は「神に感謝します。神はいつでも、私たちを導い

てキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。(2コリント2:14)からとりました。Emi(笑美)は「彼女は力と気品を身につけ、ほほえみながら後の日を待つ。(箴言31:25)」からとりました。

キリストこそ私たちの平和…。 (エペソ 2:14)

Rummel・好村幸(ランメル・こうむらさち)

一九三七年生まれ

一九九五年 山口県立萩高校卒、広島相互銀行勤務

一九六五年 Charles Rummelと結婚

一九九〇年 拓殖大学現地主事(バンクーバー)

二〇一三年引退

主は私の羊飼いです

秋田 万代子



札幌キリスト集会の皆さんと、万代子さん(一番右)

私は昭和三十二年四月、札幌で生まれました。両親は札幌の繁華街ススキノで「ふぐ」料理店を営んでいました。父は店を祖父から受け継ぎ、日本経済が向上きであった為、札幌地下街に支店を作るなど二代目としての経営も順調でした。母は専業主婦でしたが、店が忙しくなり、次第に両親ともに働くようになりました。店には板前さん、女中さん、事務員など三十人程いましたが、ワンマンな父に母と従業員が仕えていました。母が仕入れから経理まで行い、父は昼間はゴルフ三昧で、夕方から経営者として店に来てゴルフ仲間などと楽しく過ごすという毎日でした。

私は幼少期からおとなしい子供でした。母と祖父母の間で、子供らしく振る舞う事が出来ない環境にいました。祖母は真面目に働く母を嫌い、女中全員を自分の味方につけ、嫁イジメをしていました。祖母は「ススキノ三大婆」と言われる程気性の荒い姑(こ)でした。私は心の中にはいつも理由のない不安を持っていました。

子供ながら両親や祖父母の間に緊張感のある空気を感じていました。

私が物心ついた時には、母は教会に行っていました。日曜学校へは弟と行っていました。降誕劇（うたんげき）の時に羊の役をやった記憶があります。その後、母の行っていたルーテル教会の礼拝に出席していました。帰りには教会へ行かなかった父と待ち合わせて外食をする、というのが習わしでしたが、父が日頃の家族を顧みない行動を埋め合わせしている様で嫌でした。そのうち、私と弟が思春期を迎えると自然とその習慣が無くなりホッとしました。

中学・高校はミッション系の女子校に通いました。お酒を出して歓楽街で商売をしている自分の家は汚なく思え、父親が会社勤めの友達の家との違いに劣等感を持つていました。自分の楽しみだけを求めて生きている父は、家族に嫌われて当然だと思っていました。

しかし、そのような心の奥とは裏腹に、若い頃から思われない気持ちが強いため表向きには楽しそうにふるまっていたても、心の中は満たされていませんでした。心からの幸せとは何なのかわからぬまま、年齢だけ大人になっていました。

あなたが繁栄していたときに、わたしはあなたに語りかけたが、あなたは「私は聞かない。」と言った。わたしの声に聞き従わないということ、これが、若いころからのあなたの生き方だった。

（エレミヤ 22・21）

夫との結婚生活に失望していた母は、娘の結婚への思いが強く、娘だけは幸せになってほしいと見合い話をたくさん持ってきていました。仕事の休みで札幌へ戻るたびに、見合いをさせられました。就職の時と同様、結婚の意味について深く考えず、一番話をよく聞いてくれて優しい人と結婚して、横浜に移り住む事になりました。

私は人からはいつも良い人間に思われる事を願っていました。心に父をさばく気持ちがあるにもかかわらず、ひとつも心の責めは感じず、自分は正しく物事を判断できるとまで思っていました。

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。

（1コリント 2・14）

中・高校を終えるとエスカレーター式で大学へ行きました。その後、将来の計画がないまま、航空会社に就職しました。千歳空港が勤務先だったため寮に入り三年間働きました。同期入社した仲間たちは仕事ができ、皆立派に見えました。そこでの人間関係は恵まれていましたが、自分の能力の低さを感じていました。よく

結婚して三年が過ぎた頃、二番目の子供を出産するために札幌へ里帰りをした時、二歳の息子が川崎病になり札幌医科大学病院に入院しました。私の両親は入院中の孫の心配や新生児との生活で大変でしたが、夫の両親はお見舞いに地方から出てきて久しぶりに息子（夫）に会えた喜びの方が、孫の入院より勝っているように私の目には映りました。その後、お見舞いに来てくれたことへの感謝も示さず、私は感情に任せて義母に長々と手紙を書きました。自分の正義感を振りかざし、「愛情」のなんたるかをわかったかのように書き、一方的に義母を責めました。

すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによつて、自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。

（ローマ 2・1）

横浜へ戻りましたが、長期の不在や義母への手紙の事などで徐々に夫婦間がおかしくなり始めました。しかし、私は自分の正しさを疑わず、家に戻れなかったのには出産や息子の入院という当然の理由があると思っていました。ギクシヤクシしながらも普通に生活ができていたと思っていた矢先、突然夫から「好きな人が出来た。自分の気持ちに正直に生きていきたい」と告げられました。頭をハンマーで殴られたような衝撃でした。それまで人生に対する不安や不満はありませんでしたが、このように具体的に何かを突きつけられたのは初めてでした。

何度か夫と話し合いをしましたが、夫がした事を正しいか正しくないかで判断する私と、すでに私に嫌気がさしている夫とでは話し合いにならず、ついに彼は家を出て行きました。子供達が三歳と一歳の時です。今から三十二年ほど前です。

その頃、母は大きなルーテル派の教会に疑問を感

た。神様のことを何も分からぬまま、希望の光に導かれるように受洗の恵みにもあずかりました。一九九〇年の頃です。

具体的な解決策はないまま、各地の家庭集会や夫婦問題で悩んでいる姉妹たちの交わり会に集うようになりました。夫は自分のした間違いを誰かに指摘されて理解すれば、すぐに家族の元へ帰ってくるだろうとは思っていました。しかし、その思いとは反対に事態はどんどん深刻になっていきました。別れて新しい家庭を作りたいと主張する夫と、夫の帰りを待ちたいと思う私とでは折り合いがつかず、何度もの横浜家庭裁判所での調停を経ても、話し合いは全て不調に終わりました。

私と子供の生活は大きく変わりました。生活費が振り込まれなくなりました。住んでいた家のローンが払えなくなり引越さざるを得なくなりました。私も働きに出るようになりました。裁判の準備で今までの生

じ、内村鑑三の無教会派の少人数での集会に集っていました。たまたまCLC(クリスチャン文書伝道団)で『光よあれ』(キリスト集会の証し集)を見つけ、全巻を送ってくれました。私は一気に読みました。世の中にはこんなに悩んでいる方たちがいて、それでも皆さん笑顔で輝いている事に心打たれました。母は同時に、本の後ろに書かれていた、当時八王子に住んでおられた姉妹に電話をかけたようです。すると、何の前触れもなくその姉妹が横浜の私の家を訪ねて来られました。玄関を開けると知らない人がにこやかに立っているのに驚きましたが、数日後にはその姉妹がベックさんのお宅に連れて行ってくださいました。初対面ながら宣教師のベックさんの優しく包み込むような暖かな雰囲気、涙が止まらなかったことを覚えています。何かイエス様のことがわかったわけでもなく、十字架のみわざを理解したわけでもありませんでした。今まで一度も出会った事のない「希望」があるように思えまし

活を省みる書類を何枚も書かされる中、私は徐々にではありますが次のことを思わされていきました。

もし「私は間違っていない」という思いが、根拠のあやふやなものであったなら、一体「正しい」とはどういうことなのか。疑問が次から次へと出てきました。考えていくうちに、問題は自分自身にあるように思えてきました。何度「自分は悪くない」と思おうとしても、何か心に引っかかりがあって自分の正当性を認められない気分でした。

人生で様々な問題が起こった時には、常に良い解決策を自分で考えて実行するのが正しいことだ、としてきた自分の価値観が崩れ去る時でした。

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがつて、彼らを見捨てない。

(イザヤ 42:16)

自分を正しいとする思いで夫の母を傷つけ、実の父を何度も心の中で「ないもの」とした自分に、主が語られているようにでした。これまでの人生の中で、自分の思いのみで生きてきた様々な事柄が思い起こされました。昔、通ったミッシオン系の学校では礼拝や聖書の時間はありませんでした。

神様から大きく離れてしまった本当の自分の姿は惨めで哀れで、自分こそが救われなければならない偽善者であると思いました。幼い時、降誕劇で演じた羊の姿こそが、彷徨う自分なのだと気がつかされました。実は、良い人間に思われたいと願っていただけのこと、これが本当の自分の姿でした。初めて自分の心の内の思いを祈りに変えました。

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

(ローマ 7:24)

自分の心の中にある罪。誰からも責められることは無いけれど、確実にそこにある自分の罪。自分こそは正しいとするその見えない罪を意識しました。その時に初めて、主の十字架の大きさが迫ってきました。以前、ベックさんとお会いした時に感じた「希望」が聖書の中にありました。イエス様の十字架はまさに自分の為なのだと思うされました。

：御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(1ヨハネ 1:7-9)

以前は遠く離れていたあなたでしたが、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い

者とされたのです。キリストこそ私たちの平和：

(エペソ 2:13-14)

裁判や苦しい日々の生活の中で、聖書のみことばは励ましや慰めであると実感しました。神様のみことばが心の支えとなり、日々を照らし、行く先を希望で溢れさせるまさしくいのちのパンである事を知りました。

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。
(詩篇 119:105)

一九九五年三月、裁判では決着がつかないままでしたが、私は子供たち二人と横浜から札幌へ戻る決心をしました。折しも一月には阪神・淡路大震災が起こり、三月にはオウム真理教教祖の逮捕劇が連日テレビを騒がす時でした。子供達は小学四年生と二年生になっていました。私たちより先に夫は、女性とその間に出来

た子供といっしょに北海道へ戻っていました。

札幌へ戻ってから数年後、夫とは弁護士同士の話し合いで離婚が成立しました。この事が起こされてから随分と長い時間が経っていました。結果を含め全て主におゆだねしました。

二〇〇一年五月、私のことを心配してくれていた母が召されました。

母は自分が勧めた人と結婚した為に娘が大変な目に遭ったことに、ずっと心を痛めていました。夫との事を通してイエス様に出会う事ができて、すべて主のご計画だったと思っている私でしたが、そんな私に頻繁に後悔の念を訴えるので、母には信仰があるのだろうかと思っていました。

肺がんの末期で自宅療養中、二人で「虐待」についてのテレビ番組を見ていました。幼い頃を思い出した私は、ベッドで横になっている母に、自分は祖母と母の間に立ち、常に人の顔をうかがうようになってし

まったく、恨みつらみをぶちまけました。すると余命いくばくも無い母は「そうだったの。よく言ってくれたねえ。本当にごめんね。今言ってくれてありがたい。イエス様だわ!」と言いました。自分が生きているうちに娘に謝る事が出来た事を、心から主に感謝していました。母は父との結婚生活で期待がかなわなかった分、娘に対して過度な心配や偏った愛情を注いでいましたが、その瞬間に、今までの親子関係が一気に修復され、最後に主にある姉妹になった様でした。主が大きな氷の塊を溶かしてくださいました。

その後の歩みの中で、信仰を頂いていても娘への思いをなかなか手放す事が出来ずにいた母の気持ち、わかるようになりました。信仰を頂いたからと言って私は弱い人間です。主にいつも繋がっていないと、次の瞬間は自分の思いに呑みこまれてしまいます。

父は、母の葬儀で泣きながら「自分は良い夫ではなかった。でも自分も妻と同じように天国へ行きたい。」

なっていた父に会い、昔いっていた感情は解かされ、心から父の救いを祈りました。

二〇二〇年春、父は入院しました。コロナ禍でしたが、病室で父と穏やかな時を過ごす事が出来ました。天国の希望と母に会える事などを話す時間を主は残してくださいました。その年、緊急事態宣言が解除されていた六月二十五日に父は召天しました。「小さなお葬式」という今流行りの家族葬で行いましたが、弟家族、私の子供達、その配偶者、双子のひ孫達が集まりました。その後、札幌集會にご奉仕で来られている兄弟がメッセージをくださり、我が家でお別れ会をする事が出来ました。かつて私は、自分の家族は壊れていると思っていたが、主はその家族にも憐れみをかけてくださいました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
(使徒 16:31)

と挨拶の中で言っていました。しかし私はそこまで言う父を許す事が出来ず、その後も父が一人残された家を訪ねる事をせず、父の寂しさを全く理解しようとしませんでした。すべて家族の問題は父の女性問題が原因だったと心を閉ざしていました。「あなたの父と母を敬え」(マル7:10)が幾度となく心に刺さりましたが、裏腹に私の自我は強く、父との関係は堅い氷のままでした。ここでも問題は父ではなく、私でした。

その後、父は寂しさに耐えかねて猫を飼っていました。一年後には再婚しました。弟と私がその事を知ったのは数年経ってからでした。父も子供達には言いづらかったのだと思います。再婚を知り、自分の父親が別の人になったようでした。問題が多くてあんなに嫌だった家族ですが、バラバラになったようで、寂しさと喪失感を覚えました。

二〇一九年、父のすい臓がんがわかり、再び年老いた父親と向き合うことになりました。すっかり老人に

想い起こすに、父は孫達と御代田の喜びの集いに行き、旭川喜びの集いでは当時小学生だった二人の孫の受洗にも立ち会ってくれました。私が札幌に戻った時に、「おまえがクリスチャンになったのが一番嬉しい」と言いました。何も自分では出来ないけれど、娘が神様にすぎるようになったのは良い事だと考えたのだと思います。また父は、今まで自分の人生の行いのツケが娘に同じ形でやって来たのではないかと悩んでいたようでしたが、天国でイエス様と会いすべて主のご計画通りであるとわかった事でしよう。

札幌の地に生まれ、あの家に生まれ、あの父であり、あの母であり、あの弟を姉弟とし、あの夫を与えられ今があること、すべて主のご計画であったと思う事が出来るのは何より幸いです。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益と

してくださる事を、私たちは知っています。

(ローマ 8・28)

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわざいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。(エレミヤ 29・11)

札幌でも様々な試みや頑なさゆえの失敗がありました。主を忘れ、自分が正しいという思いが強くなると、主の憐れみで主は事を起こされました。

「自分に能力があれば」、「両親の仲がよくて家庭が安泰であれば」との思いは全て間違いでした。ただ主のみもとに行けば良いのだと思えるようになりました。幼い時から求めていた「本当の幸せ」とは、主に祈り、感謝し、平安をいただき、主のなさる事が最善だと思える事だとわかりました。

を知ることが出来ますように。

秋田 万代子 (あきた まよこ)

一九五七年四月二十七日 札幌市に生まれる。北星女子中・高・大学卒業、日本航空三年勤務、現在、札幌市社会福祉協議会 在宅ヘルパー

長男 秋田 敬介 (あきた けいすけ)

長女 結束 真実 (けつそく まみ)

主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行い、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。(ミカ 6・8)

主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。(詩篇 23・3)

主を喜ぶことはあなたがたの力です。

(ネヘミヤ 8・10) 『口語訳』

今は、主が「万代子、もういいよ」と言ってくくださる日まで、両親が待つ天国へ向けて、目に見えるものに目を留める事なく、全てをご存知の主を頼りに歩んで行けたらと思います。かつての私のように幸せを求めて環境を整えようと努力している多くの方達が、求めさえすれば主イエス様の心からの平安が与えられる事



たましいの牧者である主

田中明美

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな。
(詩篇 103・2)

一九九一年九月最後の日曜日に吉祥寺キリスト集会へ初めて足を運んでから、早三十年となります。振り返ると、一步一步、主が憐れんで導いてきてくださいました。そのことをお証しできればと思います。

私は一九六三年に母の実家のある岐阜県の七宗町で生まれ、一年後に弟が生まれました。当時、父は会社員で大阪勤務でしたが、私が二歳の時に交通事故で両足を失い障害者となりました。初めは病院生活、その後は東京の障害者職業訓練校に行きました。幼い弟は母の実家の祖父母宅に預けられ、私は母を慕うあまり、母と一緒に父の入院先、その後は東京の父方の親戚宅、岐阜の母方の親戚宅で暮らしました。いつも明るい母のおかげで子供らしく楽しく過ごしてきました。お世話になった親戚の方々には心から感謝しています。



私が小学生になる頃に岐阜市内に家を借りて家族での生活が始まり、父が訓練校で学んだミシンでの縫製の仕事を母とするようになりましたが、生活は大変だったようです。その後、母は結婚前に保母をしていたので、私が小学校六年生になる頃に母の故郷の七宗町立保育園で保母の仕事をする事になり引越しました。三年目くらいから園長先生となり定年になる六十歳まで働きました。そのお陰で生活も落ち着き、私は中学、高校まで岐阜で過ごしました。両親は嫉みは厳しかったですがお互いに冗談を言い合う楽しい家庭でした。私自身はよき友人に恵まれ、特に問題なく成長しました。

母に幼い頃から家にあった足踏みオルガンを教えてもらい、童謡などよく聞かせてもらっていたので音楽が好きで、親戚宅にいる時から、従妹と一緒にピアノを習っていました。小学校三年生の時にピアノを買ってもらい、本格的にピアノを習い始めました。いい先生に

出会えて、ピアニストになる夢を持つようになって音楽大学進学を目指すようになりました。経済的には厳しい状況でしたが、両親が応援してくれました。先生には東京の音大を勧められましたが、経済的に難しいため名古屋の音楽大学に進学することになりました。大学では初めての二年間は寮生活で、よき仲間に出会えて毎日楽しく過ごしました。その時の友人たちとは、今でも交流が続いています。寮は二年間しかいられないので、三年生になり大学の近くに下宿しました。

ある日、買い物に出かけた時に教会を見つけました。中に入ってみると、パイプオルガンを練習している方がいて、静かで厳かな雰囲気にかれました。大学卒業後の進路など考え始めている頃だったので、授業の空き時間に時々その教会へ行き、静かな時間を過ごすようになりました。十字架に掛かっているイエス・キリストの像を見上げて「将来のことを導いてください」と今から思えば祈っておりました。その頃は、イエ

ス・キリストを信じていたわけではなく、八百万やおよろずの神を拝むのと同じ気持ちでした。

ちょうどその頃、寮の友人の一人が聖書に興味を持っていたので、私も他の友人二人と一緒に聖書を買いました。その友人の一人が石井淳子さんです。買った直後は、旧約聖書から読み始めましたが実感がなく途中でやめてしまいました。子供の頃から本が好きで、特に外国の物語が好きだったこともあり、物語に出てくる神様を漠然と信じていました。高校から大学時代にかけては、トルストイやドストエフスキーの小説に聖書の言葉が出てくるので、いつか聖書の意味が理解できたらいいな、と思っていました。また、西洋音楽ではキリスト教の影響が大きかったので、興味はありましたがイエス・キリストの存在の意味はわからないままでした。

大学卒業後は、ヤマハ音楽教室のシステム講師となり、二年間名古屋の音楽教室で教えました。仕事は楽

しかったのですが、このまま平凡に終わりがたくないという野心がありました。大学時代に近代フランス音楽が好きになり、ジャズに通じる点があったためジャズを学びたいと思うようになり、ポピュラーミュージックスクールへ行くことを考え始めました。小学生の頃からクラシック音楽だけでなく歌謡曲やポップス、高校時代には友人の影響でロックを聞き、大学時代にはジャズを聞き始めました。ミュージックスクールを調べるうち、寮時代の別の先輩がジャズの勉強のために東京へ行っていることを知りました。その先輩とは同じ軽音楽部で親しかったので、すぐに連絡を取って見学に行き、同じスクールへ行くことに決めました。住まいも先輩と一緒に探してもらい、先輩の住まいの近くの東小金井に決めました。両親に話すと、とても驚いて初めは反対でしたが最終的に認めてくれました。父は「一度きりの人生だから、好きなようにやってみろ」と言ってくれました。ミュージックスクールは

別科という、一年間の夜間コースの音楽の知識のある人を対象としたクラスで、現役の音大生や卒業生と一緒にでした。一年間はアルバイトをしながら通い、その後はまたヤマハ音楽教室講師に戻りました。ジャズを学ぶ中で、自分はやはりクラシック音楽が好きなこと、またクラシック音楽の奥深さをあらためて知りました。

東京でのヤマハ音楽教室講師としての一年が終わる頃に、ミュージックスクールの先生から音楽事務所の仕事を紹介されました。ヤマハの講師の仕事が順調に進んでいたのも、初めはお断りしたのですが、あまりに熱心に進められるのでそちらに転職しました。東京赤坂での仕事は華やかではありましたが、世間知らずの私には利害関係や裏表のある人間関係に、ほとほと疲れました。それで半年で辞めることになり、またヤマハ音楽教室講師の仕事に戻りました。

ピアノはずっと続けており、ミュージックスクールで仲良くなった音大出身の方と、あるアマチュアの室

内楽コンクールに応募することにして二台ピアノの演奏をしました。一次試験がテープ審査だったので録音し、そのテープを聞いた時に自分の音がガサガサしていることに気づきました。自分の心を表していると思い、「これは教会へ行って心を清めなければならない」と思いました。自分にとっては大きな衝撃でした。そしてその時、吉祥寺キリスト集会のことを思っていました。

時は遡り、東小金井に引っ越した日、アパートの前で掃除をされている少し年配の女性と出会いました。向かい側にあるアパートの管理人の方で、ハキハキとした方でした。翌日、菓子折りを持って挨拶に行くと「私の愛読書です」と、星野富弘さんの本『かぎりなくやさしい花々』を下さいました。それから時々話をするようになり、吉祥寺キリスト集会へ行っている姉妹であること、ご家庭の事情、集会の話などを聞くよう

になりました。集会へ行くことを勧められましたが、その当時は夢と希望にあふれていたもので「今は特に悩みもないからいいです」と断っていました。ただ学生時代の思い出もあり、キリスト教に対しては悪い印象はなかったもので、いつか行くかもしれないと思いました。

それから三年がたって、集会へ行くことにしたのです。本をくださった姉妹を驚かそうと思い、一人で九月の終わりの日曜日に集会へ行きました。場所も確かめずに行ったので、着いたときは福音集会の終わり頃でした。集会後、外へ出てくる方々を見てみると、皆さんの顔が光っているように感じられました。その時に姉妹とは会えず、後で電話するととても喜んでくれ、火曜日の学び会を紹介されて行くことにしました。その姉妹の計らいで、学び会へ行くと何人かの姉妹方が声を掛けてくださり、席へ案内してくれました。ベック兄のメッセージと春日部の姉妹のお証しがあり、お証しには涙が出ました。

分の体の心配などで、とても赦^{ゆる}せない思いでいっぱいでした。後から母に、「どうしてあんなにやさしく言ったの?」と聞くと、母は謝っている姿を見て気の毒になってしまったとのことでした。今では、母の対応に感謝しています。運転手の方にはその後『光よあれ』（キリスト集会の証し集）を渡すことができました。半年ほどリハビリに通い、それで終わりとなりましたが、その後身体も守られています。事故に遭^あった時は「なぜ、教会に行つて心を清めようと思つていた矢先にこんなことが起こったのか!」とショックでしたが、集会の姉妹と電話で話す中で「神様がいるからこそ、このようにされたのではないか」とも思え、神様に対して半信半疑でした。

今から思うと、この時に家族が東京へ来ることになつていたこともお導きでした。家族にキリスト集会に行き始めた話をするのができたのです。父は「キリスト教か」。まあ、おまえがいいと思うならやつて

学び会の後、午後から音楽教室で教える仕事に出かけ、夜の帰り道に、家の近くの横断歩道を渡っている所を後ろから右折してきた車にぶつけられました。救急車で運ばれレントゲンなどを撮って検査した所、骨折も傷もなく無事でした。運転手は三十代前半の男性で前方不注意でした。週末の土曜日に再度病院へ行き、むち打ち症状があるので二週間安静にするように言われ、首にサポーターを付けられました。その土曜日は、岐阜の家族が父の職業訓練校の同窓会で上京することになつていました。その運転手の車で病院からアパートへ帰つて来ると父の車があり、首にサポーターをつけて現れた私を見て家族一同驚いていました。翌日の日曜日に、運転手の方がご夫婦で謝罪に来られました。母が応対してくれて「車に乗る者同士、お互いにいつこのようなことが起こるかわからないから、これから気を付けましょう。娘の休職中の保証だけお願いします」というようなことを話しました。私は将来の自

みろよ」と言つてくれました。二週間の安静期間中、仕事は休みとなった代わりに集会の姉妹方が家庭集會に連れて行つてくれたので、聖書を知る時となりました。家庭集會でお会いしたベック兄は「事故に遭つたことは、天罰ではないよ」と笑顔で仰いました。信仰を持ちたいという思いの半面、あと一歩踏み切れずにいました。ある姉妹から『イエス様からの手紙』という文章をいただき読んだ後、自転車で帰ってくる夕方、美しい夕焼けを見て「私はイエス様に愛されている」と実感が湧いてきました。家に入ると感謝の気持ちで涙が溢^{あふ}れました。イエス様についていきたいと思いました。

学び会の前にベック兄とお話しさせて頂き、祈ることができました。罪のことはよくわかつていませんでしたが、救われた喜びで十二月には洗礼も受けました。洗礼前には母から心配する手紙が来て心が揺れましたが、集会のある兄弟に相談すると「あなたが家族の初穂になるのではないですか?」と言われ、いつか両親

にわかってもらえる時が来ると信じて受洗しました。

あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。

(1ペテロ 2:25)

集会へ通い始めて一年が過ぎる頃、未信者の方との恋愛で悲しい思いをした時に、初めて聖書の言葉が自分のものとして励まされ、教えられる経験をしました。

わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、おちを加えられるからである。訓練と思つて耐え忍びなさい。

(ヘブル 12:5-7)

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではない。

く、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

(ヘブル 12:11)

その時から、少しずつ聖書の言葉の重さ、深さに目が開かれるようになり、また自分の罪深さを知るようになりました。そして、それまで自分のことしか考えず、家族に迷惑をかけてきたことを悔い改め、自分ができることは家族の救いを祈ることだけだと思ふようになりました。

わたしの好む断食は、これではないか。：飢えた者にはあなたのパンを分け与え、家のない貧しい人々を家に入れ、裸の人を見て、これに着せ、あなたの肉親の世話をするのではないか。そのとき、暁のよう^{あづき}にあなたの光がさしいで、あなたの傷はすみやかにいやされる。あなたの義はあなたの前に進み、主の栄光が、あなたのしんが

りとなられる。

(イザヤ 58:6-8)

救われた翌年には御代田の会堂ができ、翌々年には弟の運転で両親と御代田へ行くことができました。両親と名古屋や富山での喜びの集いなどに参加でき、また、岐阜で家庭集会が持たれた際にも一緒に行く恵みに与りました。ベック兄、新井稔兄弟をはじめ、集会の兄弟姉妹の暖かいお付き合いを頂いて、両親は少しずつ、集会、聖書に対して心を開いてくれるようになりました。

仕事の方はバブル期も終わり生徒が減りはじめ、ヤマハの仕事だけでは東京での一人暮らしは大変となり、祈った結果、ヤマハを辞め、一般企業に勤めることにしました。その後、集会の兄弟の会社へ導かれ、営業事務、秘書、総務、経理関係の仕事などを経験することができました。その間に、秘書検定、簿記の資格など

を取りました。会社都合で退職となるなど転職が続き、その都度折らざるを得ない状況になりますが、主の指導きで、ずっと仕事を続けて来られました。友人の姉妹たちから、私を見ていると主の指導きがよくわかる、と言われました。主の憐れみに感謝するばかりです。

仕事では音楽と離れましたが、ミュージックスクールで出会った友人の紹介で素敵なピアニストの方を紹介され、細々とですがピアノレッスンを受けました。また音楽会に行ったり、朝日カルチャーセンターで音楽の講座を受けたりなど、自分なりに音楽の勉強を続けることができました。

集会に通い始めて二年目に奏楽のお話がありお引き受けしたのですが、今までの自己実現の演奏とは違うギャップに初めはとまどいました。自分を空しくして賛美の演奏をすることを学びました。

『メサイア』合唱の練習が始まって伴奏をすることになり、また御代田での音楽会で声楽やヴァイオリン

など、様々な楽器の伴奏をさせていただくという貴重な経験をさせていただきました。

一九九七年には、集会の兄弟の発案とバックアップをいただき、三鷹の「風のホール」で音楽会を開くことになりました。私を含めて五名での音楽演奏とベック兄のメッセージがありました。両親や親戚、友人も来てくれて、とても喜んでもらえました。主は私を音楽から離すことなく、大きな贈り物をたくさん与えてくださいました。ただただ感謝するばかりです。

ハレルヤ。主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。
い。…
(詩篇 106・1)

二〇〇九年のお正月に父の様子がおかしく精密検査をすることになり、白血病とわかりました。対処療法しかないと言われ、三月に亡くなりました。亡くなる前日にお見舞いに来てくれた集会の姉妹、母、私とで

一緒に祈ることができました。父は大きな声で「ありがとうございます。ありがとうございました。名古屋集会で前夜式、葬儀を行なっていただき、五月には御代田で納骨式をしていただきました。そして同じ年の十月、母が交通事故で亡くなりました。二人とも、主を信じて天国へ行きました。今では、天国で憩っていることと思います。母の前夜式、葬儀も名古屋集会で行なっていただき、心から感謝しています。親戚は一年に二回も福音に触れる機会となりました。

この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。
(ヨハネ 11・4)

父や母の兄弟も相次いで亡くなり寂しい限りですが、残された親戚の救いを祈っています。弟もまだ主を信じていると告白していませんが、両親が亡くなつてか

ら弟と御代田へ行きベック兄に挨拶した後、弟の話をした際に「弟さんは救われていると思うよ」と言われました。控え目ですが、優しい人柄の弟のことを見抜かれたのだと思います。私がずっと東京にいて両親と離れている間、弟は両親の様々な面倒を見てくれました。共に主を喜び合える日が来ることを祈っています。

母が亡くなって、一年ほどは力が入らない感じでしたが、周りの兄弟姉妹のお祈りに支えられ、またやらなければならぬ仕事があったことで守られました。この頃の集会の兄弟姉妹方の目に見えないお祈りに、心から感謝しています。母が亡くなった翌年、集会のある姉妹の結婚式で発達障害のお子さんを見かけました。その時に『音楽療法』を思いつき、名古屋集会の河合みづゑ姉妹が以前『音楽療法』をされていると聞いていたことを思い出しました。早速お電話し、音楽療法の力をお聞きしました。自分でも本を読み、講座を

受けるなどして、音楽療法士になることを祈り始めました。

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。

(ペリピ 2・13)

母が亡くなって、一年ほどは力が入らない感じでしたが、周りの兄弟姉妹のお祈りに支えられ、またやらなければならぬ仕事があったことで守られました。この頃の集会の兄弟姉妹方の目に見えないお祈りに、心から感謝しています。母が亡くなった翌年、集会のある姉妹の結婚式で発達障害のお子さんを見かけました。その時に『音楽療法』を思いつき、名古屋集会の河合みづゑ姉妹が以前『音楽療法』をされていると聞いていたことを思い出しました。早速お電話し、音楽療法の力をお聞きしました。自分でも本を読み、講座を

色々調べて母校の名古屋音楽大学がよいのでは、と名古屋へ戻ることを祈った結果、一年後の二〇一二年の春に名古屋へ引越して二年間名古屋音楽大学音楽療法コースに編入生として入学しました。自分なりにまじめに取り組み、学生としてピアノの練習が毎日できたことは恵みであり充実した日々でした。良き先生と仲間にも恵まれたおかげで特待生に選ばれ、首席で卒業でき、日本音楽療法学会が認定する音楽療法士の試験を受けて資格を取ることができました。卒業後、リハビリテーション病院で介護士として一年八か月勤務

した後、音楽療法学会の求人にあった名古屋市のNPO法人で発達障害児等の音楽療法を行なう仕事に就きました。その後、現在の障害者人所施設に二〇一七年七月から導かれ、音楽療法士として勤務しています。色々なジャンルの音楽が好きなおかげで、利用者さんの好みに合わせて音楽ができ、とても楽しく行なっています。音楽療法士の仕事を福祉施設などで専門的にできる所がまだまだ少ない状況の中、今の職場に導かれたことは、本当に主の大きな憐れみと恵みだと思っています。音楽を通して、障害のある方、高齢の方などが心身共に生き生きとされる姿を見ると、こちらが力を与えられます。日々、主に感謝して祈りつつ仕事をしています。

音楽療法士の先輩である河合みづゑ姉妹と月一回一緒に音楽療法に参加している知的障害者施設は、もともとは新井稔兄弟が音楽療法に行っていた所でした。そこへ河合姉妹が導かれ、そして今は私も導かれている

とは私の中の財産です。

これからも、名古屋集会はじめ全国の集会の兄弟姉妹と共に、祈りつつ歩みたいと願っています。

神のみことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならなさい。
(ヘブル 13・7)

最後に、時に疲れて前を見失いそうになることが多々ある中で、原点に戻してくれるベック兄の文章で終わりにします。

「あなたはただひたすら、主があなたにお与えになった自分の仕事を続けなさい。あなたの目標は、空の恒星のように不動のものでなければなりません」

(『絶えず折れ(下巻)』ゴットホルド・ベック著 前書きより)

ことは、本当に主のご計画の計り知れなさを思います。

天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。
(イザヤ 55・9)

今は、両親に応援されて続けてこられた音楽を仕事にすることができ、日々両親と一緒に歩んでいる気持ちでおります。

私たちの国籍は天にあります。
(ピリピ 3・20)

拙い信仰の者ですが、振り返ると吉祥寺キリスト集会に行っていた頃は、ベック兄や集会の兄弟のメッセージ、姉妹会や家庭集会、喜びの集いでの交流、祈り会などに養われてきました。今では天国へ行かれた先輩の兄弟姉妹方も多いのですが、教えられた一つ一つのこ

(文中の「兄弟」「姉妹」は、イエス・キリストを信じた者が神を父とする神の家族となることから、親しく名前に付けて呼び合っています)

田中明美(たなかあけみ)

一九六三年、岐阜県生まれ、岐阜県立加茂高等学校卒業、名古屋音楽大学ピアノ科卒業、名古屋音楽大学音楽療法コース卒業

現在、社会福祉法人名古屋ライトハウスにて音楽療法士として勤務

新しい創造

藤田靖規

私は一九七三年十二月十五日、埼玉県春日部市で平凡な家庭の長男として生まれました。

生まれて幾年か過ぎ、小学四、五年生の頃から、夜、布団に入って寝よう……と目を閉じる時「自分はこれから生きる為は何をし、何処へ向かって行くのか？ 死んだら最終的にはどうなるのか？ また、今自分が目で見ているものは何なのか？ ひょっとすると他人とは違う世界を自分は見ているのではないか……」などの意味不明な、相談したくても口ではなかなか説明できないような疑問が次から次へと湧いていました。このような事を考えているうちに、いつしかこんな自分が嫌になり、自分は頭がおかしい人間なのではないかと真剣に悩んでいました。しかし、結局自分ではどうする事も出来ず、これと言った明確な答えも見つかりませんでした。

私は、ほんとうにみじめな人間です。だがこの死



ご家族と、靖規さん(右から2人目)

の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

(ローマ 7:24)

このみことばのように、私はどうする事も出来ないものから誰か助けて出してくれと、幼い頃からもがいていたのかもしれませんが。

小学5年生のとき、私はいじめにあいました。何も悪いことや、嫌がられるようなことをしているわけではないのに、なぜ標的にされるのか、なぜ自分なのか、もしかしたら自分は頭のおかしい人間だからいじめられるのか、と自分を責めたりもしました。両親にもいじめられていることを話せず、学校には行きたくないとか引越しようとか相談しましたが、何も解決にはなりませんでした。もう楽になりたいと、死を願ったこともありました。その位、当時は追い詰められていました。

この時初めて、心から見えない神様に向かってお祈

りをしたような覚えがあります。「神様、どうかこの問題を解決してください。どうか、もう苦しめないください」。当然この時は、まだイエス様に出会っていません。祈りの相手も、漠然とした「なにか」です。それからというもの、次第にいじめがなくなっていく時、本当に不思議な感じでした。何故？ どうして？ という思いでした。

神にとって不可能なことは一つもありません。

(ルカ 1:37)

今思えば、この祈りもイエス様は聞き入れてくださったのではないかと思います。このような者を、憐れんでくださったのです。

月日が経ち、高校を卒業し専門職を目指すため東京の短期大学へ入学しました。両親のもとから逃げるように、学生寮へ入り自分優先の気ままな生活をして、

6人の証し

Unser Herr lebt

二年間過ぎました。楽しい毎日ではありませんでしたが、時々何か物足りなく、満たされない不快感がありました。それは将来への不安と、幼少の頃から抱いていたずっと先のことに對する恐れです。

そんな時、中学のクラスメートだった現在の妻と再会します。就職してからもお付き合いが続き、仕事に慣れた頃、いよいよ結婚の二文字を意識し始めました。主が助け手を引き合わせてくださったのです。

その後、神である主は仰せられた。「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」
(創世記 2・18)

「式を挙げる前に、一度ベックさんに会ってください」というのが妻の家族からの一つの条件でした。とある日仕事を終え、東京の家庭集會に赴き、ごく普通の家の玄関に、ものすごい量の靴がひしめき合うよう

び、私も歓喜しました。やっと、神様が授けてくださったと。二〇〇二年八月に念願の長男が生まれましたが、体重が軽く未熟児として生まれてしまったので、そのまま保育器へと連れていかれてしまいました。自分のベッドの横に子どもがいない事や、抱けない事に妻は、自分のせいだと寂しそうに泣いていました。

二〇〇四年、そんな長男もすくすくと育ち、仕事の都合で栃木県への転勤が決まったのと同時に、二番目の子を授かりました。二番目の子が与えられたときはあまりのスムーズさに私たちはびっくりしましたが、イエス様がちょうど良いときに授けてくださいました。翌年七月に無事出産し、その子が女の子と知ったとき、私は驚きと喜びと幸せを感じておりました。本当に主の時は素晴らしいと心から思った瞬間でした。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。

(伝道者 3・11)

にして置かれ、今だから言いますが異様な光景の中に身を投じなければなりませんでした。これも結婚するためと、意を決して中に入り奥に進むと一人の外国人がソファに座っていました。ベックさんと初めてお話しした時のことです。お話の内容はあまり覚えておりませんが、とにかくよく来てくれたと喜んでくださったことが印象的でした。「また来てね」と皆さんが帰り際に言うてくださいましたが、本心は二度と来たくはないという思いでした。

そして、一九九九年五月に結婚し、神奈川県横浜市保土ヶ谷区にある会社の社宅にて、新生活を始めました。生活も軌道に乗り、そろそろ子どもが欲しいと願ってはいましたが、なかなか授かる事が出来ませんでした。不妊治療を受け、薬を飲んだり、様々なことを試みましたが、それでも叶いませんでした。もう駄目なのかと思った二〇〇一年の十二月末、エコー検査で子どもが与えられた事を知った時、妻は心の底から喜

妻の母親である岡崎美子さんに、宇都宮にも集會があるからと宇都宮集會を紹介され、私たちは渋々参加しました。私はその時はまだ救いの確信はなく、義理で参加していました。まだこれといった悩みもなく、日常の生活においては満足していたからです。

そんな生活を続けているうちに、二〇一〇年の初め頃に義母の美子さんが体調を崩し、大きな病院で精密検査したところ余命があとわずかという思いもしない宣告を受けました。膀胱がんでした。しかも肝臓にも転移しており絶望的でした。妻は動揺し、私自身もこんなことは有り得ないと現実を否定しておりました。美子さんの体調は日に日に悪化し、妻は栃木から東京へほとんど毎日、看病をしに行きました。その後姿を見送ってはいましたが、私は何もできませんでした。疲れ切った姿を見るのはもうたくさんだ、もう終わりにしてほしい、何とか助けてくださいと祈る思いでした。

病院へ見舞いに行っても、なんと声を掛けたい

のかと思っていましたが、美子さんは「ありがとう。先にイエス様のところに行くね。待ってるよ」と笑って手を握りました。私は、なぜこの人は今にも死ぬかもしれない恐怖を目の当たりにしているのに、このような毅然とした態度をとれるのかと不思議でした。この時私は、この人と同じ態度をとれるようになりたい、もつとイエス様のことを知りたいと何かスイッチが切り替わったような感じがしました。義母である美子さんは自身の身を削ってまで、婿の私にイエス様のことを伝えたかったのです。

二〇一〇年七月に美子さんは召されました。あつという間でした。何に対しても活発だった生前のときそのままの顔顔でした。あつという間に、イエス様のところへ行ってしまいました。葬儀の際、私の両親も式に参列し、思えばこの時初めて両親は集会の葬儀を体験しました。私は、聖書のみことばの朗読をしましたがその姿を見た両親は、その事に対してショックを

受けたようで、式の途中で帰ってしまいました。集会の一員として聖書を持ち、みことばを朗読したことで、裏切られたとも言っておりました。その後、電話にいろいろと説明はしましたが互いに平行線になり、結果けんか別れとなりました。

私はこのような両親の態度をみて、啞然としました。何がそこまで拒絶させるのかと。私自身も両親を否定し続けておりましたので、同類でした。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
(使徒 16:31)

この時からこのみことばを信じ、祈り、やがて家族がどう救われるのかを楽しみに待つことにしました。

その後、宇都宮集會に集い続けたある日、集っていた約半数の方々が集會を去ってしまいました。この時、代わりの窓口となつてくださった方もその後、病が与

えられ、数年後に天に召されました。

宇都宮集會が窓口を失ってしまったその時、今後どのように存続していけば良いか分からず、私達夫婦でベックさんに相談しましたが、ベックさんは信じられない事を口にされました。「あなたが、やればいいじゃないの」と。本当に目が点になりました。どうしてこんな信仰の薄く、まだよちよち歩きのような者に、そのような役目を任せるのか、意味が分かりませんでした。ベックさんは「いいんだよ、若くても。ご主人はただ語る人となれば。奥さんは祈る人となれば」とおっしゃいました。この言葉に私は自分の高慢さを知りました。自分が何かを実行しなければとか、何か大切なことを語らなければという「ねばならない」という思いがあり、そして自分にはそれができると思い込んでいました。でも実際には何も出来ません。それだからこそ、イエス様に頼りイエス様を信じてゆだねることが重要だということに気づきました。

すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言ふな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。――主の御告げ。――」(エレミヤ 1:7-8)

こうして、残された方々による新たな宇都宮集會がスタートしました。いまだに窓口ということに慣れず、戸惑っている次第です。ただ私達はこの事により、イエス様からのたくさんの恵みを、受け取っております。イエス様は、全国各地のキリスト集會の皆さんとお交わりを与えてくださいました。これは本当に感謝です。たくさんの方々の集會の皆さんから、イエス様の良きしてくださったお話を聞けることは、今まで点と点だったものが、イエス様によって線に繋がれていくような不思議な感覚です。

神に愛されている兄弟たち。あなたがたが神に選ばれた者であることは私たちが知っています。

(1テサロニケ 1・4)

兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かつて進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

(ピリピ 3・13-14)

どうか、私たちの主イエス・キリストの恵みが、兄弟たちよ、あなたがたの霊とともにありますように。アーメン。

(ガラテヤ 6・18)

両親とも徐々に溝が埋まってはきましたが、肝心なイエス様の部分はお互いに触れないようにしております

自分も直面する「死」を感じ始めていたのか、ひどく落ち込み元気がありませんでした。

イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。」 (マタイ 9・12)

両親は私がそのことを聞いて落ち込むのでは、と思い込んで、五年間も黙っていたようです。私は、母が五年間も忍耐して黙っていた事には驚きましたが、落ち込みはしませんでした。むしろ、感謝していました。「何故このタイミングで？」とは思いましたが、これがイエス様の最善の時なのでした。家族が救いに導かれることは妻と祈っておりましたし、病気が与えられても母の口から「感謝」という言葉が聞けたことが嬉しかったです。私は母と同様に、「そうだね。感謝だね」と言いながらイエス様に感謝しておりました。

今後のイエス様のご計画は私にとっては全くの未知

した。ただ食事前のお祈りは、わざと耳に入るように祈っています。両親もそれは止めません。とある日の会話の最中に、両親が顔を見合わせ何かを言いたそうにしており、沈黙の後やっと母が口を開きました。その内容は、母は難病に冒されていて、それは国指定の難病であること。現在の医療では直す術はないという事でした。病名は特発性血小板減少性紫斑病(ITP)という病気で、血小板が極端に少ない病気です。この病に罹って出血を起こすと、血が止まりにくくなります。最悪は出血多量という事も有り得ます。生活や家事をするにも、血を流すことができないので細心の注意を払わなければならない、その事が恐怖であると言いました。しかし、難病とはいえ痛みや苦しみは全くないのでその点は、感謝であると告白していました。

私は、これはイエス様だと確信しました。イエス様が憐れんでくださり、救いのご計画が始まったと感じました。父もそんな母を間近で見ていたので、やがて

数で予測もできませんが、必ずや両親と弟が救われ共に賛美できる日が来ると確信しております。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんと
いうしあわせ、なんとという楽しさであろう。

(詩篇 133・1)

いつどんな時でも、イエス様は傍にいてくださいます。こんなどうしようもない者も、憐れんでくださる事が嬉しくてたまりません。このようなお方が、どんな時でも導いてくださることを喜びながら歩めることに、只々感謝しかありません。これからイエス様の後を慕い求めていきたいです。そしていつの日か雲の上で、イエス様と顔と顔を合わせた時に心から、「イエス様。ありがとうございます」と言える日を、待ちわびております。



左から、明日香さん、ベック夫妻(中央)、靖規さん

見えるものではなく

藤田 明日香

御霊も花嫁も言う。「来てください。」「これを聞く者は、「来てください。」と言いなさい。渴く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。…」これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかし。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

(黙示録 22:17、20)

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いつさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競争を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

(ヘブル 12:1-2)

藤田 靖規 (ふじた やすのり)
春日部市立粕壁 (かすかべ) 小学校、春日部市立春日部中学校、埼玉県立庄和高校、東京職業訓練短期大学校卒、いすゞ自動車 (株) 栃木工場勤務

妻 明日香 (あすか)
長男 玲音 (れおん)
長女 歌望 (かのん)

私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。(2コリント 4:18)

我が家の初穂は母です。母は秋田の田舎暮らしから都会に憧れ、東京人の父と結婚し春日部市に住まうようになりました。初めての地、初めての子育ての中で、求めて私を教会の幼稚園に入園させた事がイエス様と出会うきっかけでした。私自身も日曜日には礼拝に行くことが習慣で、お友達と賛美することも大好きでしたし、イースター、夏キャンプ、クリスマス会、元旦餅つきも楽しいひとときでした。一方、学校では友達と話が合わず、一人でいることの方が気楽であることも感じていました。

母は教会員になり、熱心に奉仕し、聖書をよく勉強していました。この世的に良くないことが起こると、「あなたの普段の行いが悪いから、罰が当たったのよ!」

と咎められました。しつけに関しては妹、弟よりも私に対して特に厳しかったように思います。やがて中学・高校と進むにつれて部活動で忙しくなった私は日曜礼拝に行かなくなり、年に数回顔を出す程度になっていました。

そのころ、母が「教会を脱会した。これからはキリスト集会にいくから。イエス様にすべてお任せすればいいんだって！」と急に喜ぶようになりました。母のあまりの変わりように不気味さも感じましたが、イライラしていない母は私にとっては好都合でした。それにしても「教会ってどこも同じではないの？ イエス様に違いがあるの？」と疑問に思いながらも、しばらくは母の様子を伺っていました。

年頃になり、まだイエス様を信じていない主人との結婚も、「私は今まで母の言うことを良い子になって聞いてきたのだから、結婚だけは私の好きにさせて欲しい」というわがままな思いを貫き通しました。母は

粉々に砕かれました。その時はイエス様をまだよく知らなかった夫にも「一緒に祈って欲しい」と頼んで、共に祈るようになりました。イエス様は私をつくりかえようとしておられました。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであるたのおきてを学びました。

(詩篇 119:71)

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

(エペソ 5:22)

そんなある日、母から泣きながら電話がかかってきました。「私にはもう時間がない。余命あと二週間だつて」。病気のことを何も聞かされてなかった私は驚きを通り越して、頭が真っ白、手は震え、どうすれば良いかわからず立ちすくんでしまいました。「あと二週

案の定、大反対してきました。それならベックさんと会って欲しいと懇願され、しぶしぶ神楽坂の家庭集会に主人と共に集いました。その時の記憶としては、玄関にあふれんばかりの靴とバラ柄のカーテン……。ベックさんの話はちんぷんかんぷんでした。

結婚生活では、すっかりイエス様とは離れてしまっていました。やがて子どもが与えられ、成長していく中で、「やはりイエス様なしの子育てはいけない！」と不意に思われました。そして、母に相談したところ、宇都宮集会に集うように勧められました。しばらくは以前のように「日曜日の習慣」として集っていました。食事の交わりが何より苦手で、福音集会が終わるとさっと帰るような者でした。

そんな折、詐欺にあつたり、交通事故を起こしたりとイエス様による私への砕きが始まりました。イエス様よりも大切にしているものがあることを示されたり、夫よりも上に立って權威に従わない私をイエス様は

間の命って……。イエス様どうしてですか？ まだ、母に何一つ感謝できていません！」と思わず叫んでしまいました。母は脾臓癌の末期で手術も不可能であるということでした。東京赤坂の病院に入院し、坂を転がり落ちていくように悪化していく母の姿を見せられ、何もしてあげられない自分に腹が立ち、情けなくもなり、看護していく中で心も体も憔悴しきっていました。

主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。

(ヨブ 1:21)

主治医と初めて面談した日、こんなことを言われました。「お母さんには真実を話して欲しいと言われ、すべてをお話しました。死を宣告されて普通は取り乱すでしょ？ でも、お母さんは全てを気丈に受け入れていましたよ。お母さんは素晴らしい信仰をお持ちですね。」

しかし、私の願うようにはなく、あなたのみこころ
のようになさってください。 (マタイ 26・39)

母は携帯で親戚や友人に「見舞いはいいから、私の
葬儀に来て！」と連絡していました。それを聞いた方
はさぞかし驚かれた事と思います。集会の皆さんが毎
日代わる代わる訪れてくださり、病室はあたたかい祈
りと賛美で満ち溢れていました。母は「ごめんね、私は
先に天国にいくけど、みんなはゆっくりきてね。」と嬉し
そうに声をかけていました。ベックさんもお忙しい
中をぬって駆けつけてくださいました。その日の母の
メモ書きにはこうありました。

「今日、ベックさんからイエス様の電話番号を聞い
た。5015」。

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。私はあなたを助
け出そう。 (詩篇 50・15)

あなたの目は、美しい王を見、遠く広がった国を見る。

(イザヤ 33・17)

母の葬儀は、私たちにとって初めて目にする集会の
葬儀でした。母は生前「集会の葬儀はいいよ！」と喪服
を着て喜んで出かけていくので、ちょっと不謹慎じゃ
ないの？と思っていました。祭壇には母の大好きな
ひまわりの花が明るく飾られ、まるで結婚式のようで
した。目立たない母ではありましたが、予想を超えて
二百人ほどが参列してくださり、母がどんなに主に愛
され、主を愛したかをその時になって初めて知ること
となりました。不器用な母ではありましたが、妻とし
て、親として、一人の罪人として最期まで必死にイエ
ス様にすがりつき、生き抜いた姿は、私にとって初め
てイエス様を体験する出来事でした。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦

ある看護士さんにはこうも聞かれました。「お母様
は死を目の前にしてどうしてそんなに感謝されるので
すか？」母は壮絶な痛みの中で最期の最期まで主を喜
んで証し、そして大急ぎで天国への階段を駆け上がっ
ていきました。そんな母の姿を見て集会の皆さんは
「本当にうらやましい！」と言ってくださるのです。主
イエス様を愛する者たちにとって何よりの励ましと慰
めです。

私たちの国籍は天にあります。 (ピリピ 3・20)

召された時の母の顔はふわつと笑顔になって輝き、
ゴールインしたことを私たちに知らせてくれました。
親孝行する時間もなく、感謝も少なかったと思われ
ることもありました。が、またすぐに天国で会える希望
が、約束が与えられていることに感謝です。

がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみです。
しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。

(ヨハネ 12・24)

その数年後、小さな群れの宇都宮集会に激震が走り
ました。集会に集われていた方たちの半数が突然集会
から離れて行きました。私たちは宇都宮集会に集い始
めたばかりでしたので、「集会にもこんなことがある
の？」と呆然としました。メッセージに來られた集会
の方たちが心配して共に祈ってください、支えてくだ
さり、感謝でした。そのうちに宇都宮集会で窓口をさ
れていた方も召され、今後どうすれば良いかわからず
ベックさんに相談しに行きました。すると、「あなた
たちがやればいいじゃない？」とあっさりおっしゃり
「兄弟は語る人、姉妹は祈る人だよ」とにつこりされま
した。これまた啞然としました。「こんな未熟な者たち
が窓口やメッセンジャーが務まるの？ 重い荷物をも

らってしまった：」しかし、そのような思いこそが自分たちの力でやろうとしている傲慢であることに気がつかされました。「主よ、私たちは何もわからない、何もできませんからお願いいいたします」。

まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。

(エレミヤ 17)

そして、主が新しくされた宇都宮集会で初めて葬儀が行われた時のことです。信仰の先輩方に色々と尋ね、未信者のご遺族との急な打ち合わせにも無理を言っで同行をお願いしたりしました。いつも快く引き受けてくださり、主にあつて福音のために共に祈り、共に走ってくださる姿には感謝でしたし、多くのことを学ばせていただきました。

葬儀は祝福される場であることを知っているサタ

通して練られ、成長させるためであることを覚えます。

信仰の試練は、火を通して精錬されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであつて、イエス・キリストの現れるときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。

(1ペテロ 17)

子どもたちが岐路に立つ時、私たち親は「子どもたちがイエス様と真に出会い、体験できますように」と祈ります。しかし、子どもが悩み、苦しむとき、親も共に悩み、苦しまなければならないことを学びました。イエス様を信じているといつても親として相変わらず的外れな者であり、子どもたちを混乱させ、つまずかせているのはこの私であることも示されます。子どもたちと同じ所に立って共に碎かれ、共に悔い改めに導かれた時、それ以上に主は憐れんでくださり、恵んでくださるお方であることを知りました。それは子ども

ンは猛攻撃してきます。準備の段階からそれは始まり、当日はとても緊張します。イエス様は私に「それでもあなたは私を愛しますか？」と問われます。逃げないで、ただただイエス様だけを見ていくように、私のための訓練なのだといつも思わされます。そして、葬儀を通して圧倒的な主の御栄光と御愛と慰めを体験できること、主の奇跡と不思議を目の当たりにできるのは特権です。

祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ。(伝道者 7:2)

また、私生活においても、黙っていてもなぜか主を証しするようになっていたり、いつも主を覚えるように試されていることに感謝しています。それは痛みを伴うことも多々ありますが、主が愛する者を試練の数だけ体験させていただけます。親は子供たちの信仰に対して祈らずにはおれません。ですから子どもたちには親として目に見えるものではなく、目に見えないものを遺していききたいものです。

神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。

(マタイ 6:33)

親子の関係はイエス様と私の関係と似ていると感じます。「イエス様はこんな時、私にどのようなおっしゃるのだろうか？」と立ち止まって静まると子どもたちに対する言葉や態度にも違いが出てきます。そして、そのような体験を通して、母はなぜ私を厳しく育てたのかを知る事ができました。

わがままにさせた子は、母に恥を見させる。…あなた

の子を懲らせ。そうすれば、彼はあなたを安らかにし、あなたの心に喜びをあたえる。
(箴言 29 15、17)

昨年からのコロナウイルスの感染予防のために、以前のように主にあつて集まることができなくなっています。集会に集う皆さんとの喜びのひとつが与えられていたことはなんと恵みの時であったのだろうと思わされます。しかし、これも主が何か意味があつて起こされたことです。私たちは個人的に主イエス様との霊的な交わりの大切さをさらに感じましたし、たとえ集会に集う皆さんと集まれなくとも、家族みんなが揃つて主の御前に出ることが何より主に喜ばれる礼拝ではないのかと感じるようになりました。また、ベックさんがかつて「毎日が礼拝だよ」とおっしゃっていたのを思い出します。いつでもどこでも主の前に静まる時、それは礼拝だと思います。

くなるどころか次々とやってきますし、「どうして私ばかり!」とつぶやくこともありました。今は、イエス様を信じる者として「悩みながら喜ぶ」という考えられない特権が与えられていることに感謝です。

すべてのことが、神から発し、神によつて成り、神に至るからです。
(ローマ 11:36)

もうすぐイエス様が迎えに来てくださいます。

この世で残された日々をイエス様と共に最期まで…。

死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。
(黙示録 2:10)

この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。
(マタイ 24:14)

こうした中、天に召されていく集会の皆さんが多くおられます。ご遺族の意向で葬儀には参列できず、最期にお送りすることさえできません。またご遺族に福音をお伝えすることができないことを残念に思っています。しかし主は、私たちの考えや思いをはるかに超えて直接働いてくださるお方です。

人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。
(エペソ 3:19)

初めて集会に来た時、穏やかな笑顔で集っている集会の皆さんを見て、「イエス様を信じれば悩みがなくなるんだ!」と思っていました。ところが悩みはな

藤田明日香 (ふじた あすか)

一九七三年六月二十二日生まれ。春日部市立内牧小学校卒、春日部市立春日部中学校卒、埼玉県立杉戸高等学校卒、国際学院埼玉短期大学幼児教育科卒、大袋わかば幼稚園退職

夫 靖規 (やすのり)

長男 玲音 (れおん)

長女 歌望 (かのん)

キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

【電話】 0422-21-8450（集会所）
東京都 武蔵野市 吉祥寺 本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会 10:30 / 18:30

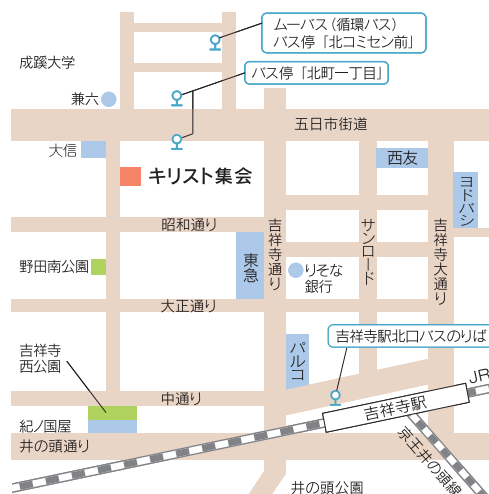
火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:30

中高生日曜クラス 9:30

【バス】 ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によることばをもつてなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものではありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらさげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

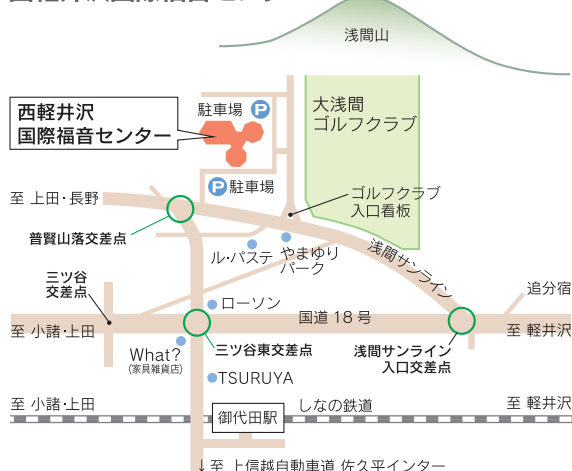
家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
【電話】 0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
【電話】 0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201

アクセス

【鉄道】

しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分 (1000 円程度)
徒歩 約45分 = 3 Km

御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】

上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分 (約7km)
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒とすることができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと - ヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ - 私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

実を結ぶ命 がんのうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そここのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の存在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにもかも私たちが神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物



主は生きておられる 第57号

定価100円（税込み）2021年8月1日発行

編集スタッフ	岩本秀造 黒澤錬二 鈴木力
	芳我幸雄 福留伸子 牧野正士
印刷・制作	ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン	飯守格太郎
発行所	キリスト集会

キリスト集会のホームページ <http://christ-shukai.net/>

出版本を購入されたい方、お問い合わせ webmaster@christ-shukai.net

また、キリスト集会のホームページの「出版物」のサイトからもメールにてお問い合わせが可能です。